

日本紀標註

卷之十八

和書門			
二六	一四	三七	四
冊	架	函	號

庫文閣内		和
三七	四	書
函	三七	
九	二六	八
架	冊	號

(八十才)

内閣文庫	
番號	和 43718
冊數	26( 18)
函號	137 99



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak





原本卷首不日  
本書紀卷第二

十二とらるる○

豊御食炊屋姫  
天皇法王帝説

志支夜比賣天

皇小作とり是

其御世小称

たる御名小て

額田部皇女と

申ぞ真の御名

あり此豊を守

の如く御食以

下を謙遜の称

あり居し此天

皇を後小推古

と諡奉り

日本紀標注卷之十八

敷田年治謹注

推古天皇

豊御食炊屋姫天皇

豊御食炊屋姫天皇天國排開廣

庭天皇中女也橘豊日天皇同母

妹也幼曰額田部皇女姿色端麗

進止軌制年十八歲立爲淳中倉

太玉敷天皇之皇后三十四歲淳

軌制、莫字伊勢物語、治をよみ、成務紀、幹了をよみ、孝徳紀、明直をよめ、義、字の如し、○巳卯八日、○豐浦宮、大和国高市郡、志、小同郡、豐浦村、舒明紀、小豐浦寺、併見、

丙辰十五日、礎中、和名抄、礎、都美以之一、云以之須惠、○丁巳十六日、○巳卯十日、○録攝政、字書、小録、總也、文選、策秀、才、文、小、朕、兼、録、御、天、握、樞、李、善、録、與、録、同、注、し、李、周、翰、録、符、也、天子受命、執、之、と、注、せ、馬、官、職、員、令、左、右、馬、寮、生、而、能、言、平、氏、太、子、傳、

中倉太珠敷、天皇崩、三十九歲、當于泊瀨部、天皇、五年十一月、天皇爲大臣馬子宿禰、見殺、嗣位既空、群臣請、淳中倉太珠敷、天皇之皇后、額田部皇女、以將、踐祚、皇后辭讓之、百寮上表勸進、至于三、乃從之、因以奉天皇璽印、冬十二月、壬申朔巳卯、皇后、即天皇位於豐浦宮、

元年春正月、壬寅朔、丙辰、以佛舍利、置于法興寺、刹柱、礎中、丁巳、建豐聰耳、皇子、爲皇太子、仍録攝政、以萬機、恣委焉、橘、豐日、天皇第二子也、母皇后曰穴穗部、間人皇女、皇后懷妊、開胎之日、巡行禁中、監察諸司、至于馬官、乃當厩戸、而勞忽產之、生而能言、有聖智、及壯

○日本紀標注卷之十八  
○二

小生四月太子能言○有聖智  
按馬子と合カ同心して佛  
力同にして佛然  
小准忠良を殺し遂天位を覆し永世無比の逆賊小黨與し終ひしを聖智  
と稱奉りしを故に○知未然按其御子山背大兄王をまじめ子弟妻  
妾悉入鹿がため滅されたるを如何若らかじめ未然をより終るべし  
入鹿が父祖を殺して子孫無事の策をこそ建置給ふべき小行らむや  
内教を、教を云、○外典も儒書を云、然と  
我皇典より見る時、何とも外教あはをや  
○上宮も、ウヘノミヤとよむべし、大和志、十市郡上宮村

一聞十人訴、以勿失能辨、兼知未  
且習内教於高麗僧惠慈、學外典  
於博士覺舒、兼悉達矣、父天皇愛  
之、令居宮南上殿、故稱其名、謂上  
宮、廐戸、豐聰耳太子、秋九月、改葬  
橘、豐日、天皇、於河内磯長陵、是歲

あま磯長陵、諸陵式、在河内国石川郡、北城東西二町、南北三町、守戸三烟、志不在石川郡、春日村、○四天王寺、崇峻天皇前紀、不見、延元、元亨、秋書、小於玉造岸、上營寺、安四天、像分、物部氏、資産、納寺、推古元年、移難波荒陵、東、故曰荒陵寺、又曰敬田寺、南北一里、東西里餘、有池、曰荒陵池、云々、扶桑略記、小四天王寺、法号荒陵寺、荒陵郷、東、建立、故以處、村号寺、云々、荒陵、云々、既仁德紀、不見、延元、前皇廟、陵、記、天王寺、舊記、を引、て云、四天王寺、在難波荒陵村、故、俗号荒陵寺、寺、西南有荒陵、相傳、仁德天皇、築之、以為陵、處、其後、以為不可、更、石津原、以定、陵地、大山、陵、是也、此陵、空荒、故名、荒陵、俗、云、茶臼山、為君親之恩、競造佛舍、按、小君親の恩を思、を毀、べし、其、を毀、べし、其、欽明十三年、物

始造四天王寺、於難波、荒陵、是年也、太歲癸丑、  
二年春二月丙寅朔、詔皇太子及大臣、令興隆三寶、是時諸臣連等、各為君親之恩、競造佛舍、即是謂

中二公の奏言  
を見よ○謂寺  
焉欽明紀注  
せり○沈水天  
智紀不沈水香  
梅檀本草綱目  
不沈香一名沈  
水香釋名木  
之心節置水則  
沈故名沈水亦  
曰水沈半沈者  
為棧香不沈者  
為黃熟香云々  
續博物志不沈  
香雜木也朽蠹  
浸沙水歲久得  
之五雜俎不沈  
香樹類椿細枝

寺焉  
三年夏四月、沈水漂著於淡路嶋、  
其大一圍嶋人不知沈水、以交薪、  
燒於竈、其烟氣遠薰、則異以獻之、  
五月戊午朔丁卯、高麗僧惠慈歸、  
化、則皇太子師之、是歲百濟僧慧  
聰來之、此兩僧弘演佛教、並為三  
寶、之棟梁、秋七月將軍等、至自筑  
紫

緊實未爛者為青桂云々、帶班點者為鷓鴣沈云々、梁書林邑國條、沈木土人斫  
斷之、積以歲月、朽爛而心節獨在、置水中則沈、故名曰沈香、次不沈不浮者曰穢香、  
也、云々、猶本草啓蒙香木條、大和本草藥木條、不詳、云々、○丁卯十日○百濟下  
原本、僧字を脱せり、叙紀不極て補ふ○將軍等至を、崇峻五年紀不見、云々、  
法興寺を、大和  
國高市郡不在  
マ、一名飛鳥寺  
と云、十四年紀  
不也、元興寺と  
も記せり元亨  
叙書不、元興寺者、上官太子討守屋時、蘇我馬子又誓營寺、故飛鳥地創之、推古四  
年成、始曰法興寺、後改焉と云、續紀七靈龜二年、始從建元興寺、于左京六條四  
坊、大和志添上郡、奈良飛鳥寺金堂五層塔、今猶存焉云々○寺司を、後不造寺  
使と云、云々類、云々、増鏡七、清涼寺、云々、御幸、云々、  
寺つり、云々、云々、云々、云々、  
々、猶孝德紀不也、寺司見、云々、  
甲午二十二月、  
原本午を子不

五年夏四月丁丑朔、百濟王遣王

作とり、通證ふ  
改たるふ従ふ

子阿佐朝貢、冬十一月、癸酉朔甲

午、遣吉士、磐金於新羅。

六年夏四月、難波吉士磐金、至自

新羅而獻鵲二侯、乃俾養於難波、

杜因以巢枝而產之、秋八月己亥

朔、新羅貢孔雀一侯、冬十月戊戌

朔、丁未、越國獻白鹿一頭、

鵲、和名抄、加佐佐木と注せり、韓鷲の轉ふれべし、肥前肥後の海畔、多し、形も鳥に似て、少腹及翅、本白く、末も白し。○難波杜、大坂より一里許、東森村に森、官と云、乃、即其古趾あり、杜をモリとよめるも、天武紀に、高市杜、式小河内国安宿郡、杜本、神社ふどり、然、小東雅をけじめ、杜を杜の誤ありと云、とど、新撰字鏡に、杜、徒古、及毛利と注し、字鏡集類聚名義抄等の、古字書にも、本篇、部ふ入、て、モリと注せり。○孔雀、和名抄、俗云宮尺とのみりて、正

訓ふし、日本記略、寛弘四年閏六月、條、大東国商客、周文德所獻孔雀、天覽之後、於左大臣小南策、作其巢養之、去、四月晦日以後、生卵十一丸、異域之鳥、忽生卵、時人奇之、或人云、此鳥聞雷聲、孕、云々。○

丁未十日、○白鹿、仁德紀、不見也、たり

辛酉廿七日、○舍屋和名抄、宇、夜加須と注せり、家、栖り、源氏東屋、小、やりのたつみのす

七年夏四月、乙未朔辛酉、地動、舍屋悉破、則令四方、俾祭地震神、秋

九月、癸亥朔、百濟貢駱駝一足、驢

一足、羊二頭、白雉一候

之辰已隅あり、大伴、家持、ふと参考、べし。○地震神、續紀十一、天平六年遣使、畿内七道、檢差、祭地震神。○駱駝、和名抄、良久太乃、字万と注し、本草綱目、駝、狀如馬、其頭似羊、長項垂耳、脚有三節、背有兩肉峯、如鞍形云々、今舶來の、此、あて、人の見る、処、あり。○驢、和名抄、似馬、長耳、宇佐岐、無麻と注し、續紀十一、金長孫等拜朝、進云々、驢二頭、騾二頭。○羊、和名抄、比豆之と注し、二角獸、あるを、人能、たれ。○白雉、孝德紀、穴戸、司草壁連、醜、經、獻白雉、と云、和爾雅、小

馬一匹畜一頭  
鳥一翅と記せ  
○境部臣  
坂合部連  
あじけむむ雄  
略紀小注せ  
天武十三年紀  
小境部連賜姓  
曰宿祢○大將  
軍を軍防令  
凡將帥出征滿  
一萬人以上將  
軍一人副將軍  
二人とらる○  
原本擊新羅下  
ふ於是直指新  
羅の六字なり  
衍文あるむ削

八年春二月、新羅與任那相攻、天  
皇欲救任那、是歲命境部臣爲大  
將軍、以穗積臣爲副將軍、並闕則  
將萬餘衆爲任那擊新羅、於是直  
指新羅、以泛海往之、乃到于新羅、  
攻五城而拔、於是新羅王惶之舉  
白旗、到于將軍之麾下而立、割多  
多羅、素奈羅、費知鬼、委陀、南迦羅、  
阿羅等六城、以請服、時將軍共議

○多多羅以  
下四村繼體紀  
小見正たり、但  
弗知鬼を彼如  
小費智小作より○南迦羅阿羅を神功紀小見也  
たり、原本等を々小誤とて、今一本小誤りて改む  
神も人名あり、  
和名抄和泉國  
大鳥郡郷名上  
神加無都美和  
土佐風土記小  
神河訓三輪川  
云々、万葉三小  
苦毛來兩可  
神之埽あとい  
是も神を三  
つと訓めり例  
あり、然よめり

曰、新羅知罪服之、強擊不可、則奏  
上  
爰天皇遣難波吉士木蓮子於任那、並  
復遣難波吉士木蓮子於任那、並  
檢校事狀、爰新羅任那王二國遣  
使貢調、仍奏表之曰、天上有神、地  
有<sub>二</sub>天皇、除<sub>二</sub>是<sub>二</sub>神、何亦有<sub>レ</sub>畏乎、自  
今以後、不有<sub>二</sub>相攻、且不<sub>レ</sub>乾<sub>二</sub>船<sub>二</sub>、每



故も御世々々  
の天皇大和国  
を崇め給ひし  
也、神と申せむ、三輪み限りと思ふよ、遂み此訓りり○任那王の王、字も、  
二国、下み附て、うはべし○地有天皇、万葉五、都智奈良婆大王伊麻周○二神、  
按み上代天皇を、神と申し、常みて、實み神みぞ大坐せざるを、今も神  
と申、おとを、あらざる世ととあれき○船舵の舵を、施み作りり  
班鳩、用明紀み  
注せて○戊子  
五日○耳梨行  
宮も、大和国十  
市郡みて、耳無  
山の麓、木原村  
み古趾りり○  
大雨、原本火雨  
み作りり、垂仁  
紀み、大雨とわ

歲必朝、則遣使、以召還將軍、將軍  
等至自新羅、即新羅亦侵任那、  
九年春二月、皇太子初興宮室于  
班鳩、三月甲申朔戊子、遣大伴連  
齧于高麗、遣坂本臣糠手于百濟、  
以詔之曰、急救任那、夏五月天皇  
居于耳梨行宮、是時大雨河水漂

るみ、扱て改む、  
火も氷の誤り、  
皇極紀み氷雨  
記の中巻み、大  
氷雨とゆ、此  
大を火み誤見  
るも、久しきみ  
や、既、和名抄み  
も、私記を引て、火雨と記せり○戊子八日○間諜者も、窺見  
人あり、昭公十八年、左傳み、懼、讒、惡、之、間、諜、之、○甲申五日  
來目皇子も、用  
明天皇の御子  
あり○神部、神  
代紀み、吉備神  
部、職員令神祇  
官、條み、神部三  
十人、齋宮式み、  
神部四人、細字

蕩、滿于宮庭、秋九月辛巳朔戊子、  
新羅之間、諜者迦摩多、到對馬、則  
捕以貢之、流于上野、冬十一月庚  
辰朔甲申、議攻新羅、  
十年春二月己酉朔、來目皇子、爲  
擊新羅將軍、授諸神部、及國造伴、  
造等、并軍衆二萬五千人、夏四月  
戊申朔、將軍來目皇子、到于筑紫、

中臣連部二人、忌部連部二人とらう神事、奉仕を依人を云、○国造、原本造を遣ふ誤り、例ふ、て改む、○嶋郡、筑前国の郡名、和名抄、志摩とら、○巳酉三日、觀勒、三代實錄、貞觀三年六月、條、領行長、慶宣明曆經、先是、陰陽頭、從五位下兼行曆博士、大春日朝臣、真野麻呂奏言、

乃進屯嶋郡而聚船舶運軍糧六月丁未朔巳酉大伴連齋坂本臣糠手共至自百濟是時來目皇子臥病以不果征討

冬十月百濟僧觀勒來之仍貢曆本及天文地理書并遁甲方術之書也是時選書生三四人以俾學習於觀勒矣陽胡史祖玉陳習曆

謹檢豐御食炊屋姫天皇十年十月百濟僧觀勒始貢曆術而未行於世高天原廣野姫天皇四年十二月有勅始用元嘉曆

法大友村主高聰學天文遁甲山背臣日並立學方術皆學以成業閏十月乙亥朔巳丑高麗僧僧隆雲聰共來歸

次用儀鳳曆云々○天文易上象傳、觀乎天文以察時變、大全謂日月星辰之錯列、寒暑陰陽之代變、觀其運行、以察四時之遷改也○地理、漢書地理志、地東西九千三百二里、南北萬三千三百六十八里、同溝洫志、地執西北高而東南下也云々、是支那國地理の私説、河東南流、西北高、東南下、見て、かゝる愚鈍を云、云々、同方術傳、風角遁甲七政云々、注、遁甲推六甲之陰、而隱遁也、即ト茲の學、方術、天文醫卜の類を云、考課令、占候醫卜効驗多者、為方術之最○書生、學令、凡書生、以寫書上中以上者、聽貢、義解、謂定書、品第、待式處分、其書生、唯以筆迹、功秀、為宗、不以習解、字樣、為業、與唐異也○陽胡史、姓氏錄、不自隋、煬帝之後、遠率、楊、阿、子、王、とら、按、此、十年、隋、文帝、仁壽、三年



在る地名あり、  
万葉七小、印南  
野者、往過奴良  
之、天傳日笠浦  
波立見、○壬申  
四日、○小墾田  
宮、欽明紀不見  
之、即大和國  
高市郡豐浦村  
小のり、○秦造  
河勝、皇極紀小  
此人を禹都麻  
佐と諺へ、上  
代を通もして  
云、河内國讚  
良郡小、秦村太  
秦村相並、○  
蜂置寺、山城國

月辛丑朔癸卯、當麻皇子自難波  
發船、丙午、當麻皇子、到播磨時、從  
妻舍人、姬王薨於赤石、仍葬于赤  
石、檜笠置、上、乃當麻皇子、返之、遂  
不征討、冬十月己巳朔壬申、遷于  
小墾田宮、十一月己亥朔、皇太子  
謂諸大夫曰、我有尊佛像、誰得是  
像、以恭拜、時秦造河勝進曰、臣拜  
之、便受佛像、因以造蜂置寺、是月

葛野郡小のり、  
朝野群載、見  
とれる廣隆寺  
縁起、字、秦公  
寺一名蜂岡寺、小墾田宮御宇、推古天皇即位壬午之歲、奉為聖德太子、大花上秦  
造河勝所建立、廣隆寺云々、爰壬午とらる、此御代の三十年、太子薨去  
の翌年、多路を建立と云、なと此紀、小符を、又大花上も、孝德天皇、大化五年小  
制たる冠名、なとむ、又符を、左も右も、浮屠小出るものも、虚誕を以て作  
出たれを惣て、信、なし、○大楯及靴を儀仗あり、○繪于旗幟、是を式日、建る  
ものあり、通證、小式、見、なると前朱雀後玄武等を引出たり、も非なり、其を支  
那學行、なつる、項、よりの、なと、なと、なと、此御世、小、なと、なと、なと、旗、小、畫、く、な  
との、なと、なと、なと、又同書、小、繪、の名義を、云、なと、なと、なと、音、呼、之、也、と、云、なと、音、訓  
暗合の例を、あら、なと、なと、なと、和名抄、出雲國、秋鹿郡、郷名、惠曇、と、なと、なと、同、國  
風土記、小、國、雅、美、好、有、國、形、如、畫、靴、哉、吾、之、宮、者、是、處、造、事、者、詔、故、云、惠、伴、と、なと、  
神代、小、支、那、字、の、音、を、借、り、て、呼、び、なと、なと、なと、思、へ、畫、靴、と、なと、靴、形、の、畫、み、て、  
巴、と、云、義、も、是、なと、○旗幟、も、風、小、ハ、タ、く、と、なと、なと、物、ゆ、なと、名、づ、く、め、  
壬申五日、○冠  
位、記、の上、卷、小

皇太子、請于天皇、以作大楯及靴、  
又繪于旗幟、  
十二月、戊辰朔壬申、始行冠位、大

投棄御冠播磨  
風土記云品太

天皇不撤御冠  
故号陰山前と

何是上代よ  
冠のりし證

とす然も位を  
叙るも冠を賜

ふ亦とあるも  
此御世より始

ふ好字を撰み  
大小に分たる

ありしめ序も  
厩戸皇子の私

しめつは權輿  
ありし北史も

を誤あり叙紀  
私記曰大徳師

也小礼大信七  
位也小信大義

理も拙き説あ  
らざるや三位

○當色純詳あ  
らざる孝徳天

紺緑と定たれ  
む是を上ぬら

著縁是をいり  
あは製ありり

年治往年難波  
不在し時白山

安兵衛の家不  
傳

徳小徳大仁小仁大禮小禮大信

小信大義小義大智小智并十二

階並以當色純縫之頂撮捻如囊

而著縁焉唯元日著髻華

髻華此

云于孺

此

云于孺

云于孺

云于孺

云于孺

云于孺

云于孺

云于孺

云于孺

云于孺

云于孺

云于孺

云于孺

たる古帽を見たて形袋のやう折目ありて

を職人歌合の画み見をたる帽の

とあり引立をも立烏帽の状あり

たのり猶上代のも是とも別あめれど

るを古言ふモトホリと云や

と云は是を併見はべし是を挿頭

○戊辰三日○

十七條神代紀

み條々をチチ

と云は彼処に注

しつ○以和為

貴論語不禮之

易く法を行ふ  
才難きものか

### 事理自通何事不成

アケらしし隣里論語の注、五家、為隣、五隣、為里。○上和下睦、是ていよいよろし  
た語ありを、上と崇峻天皇を弑奉て、下と忠臣物中二公を害せて、此憲法行そ  
れましうば、ふれ、国乱も起らざらましと、  
かへすく口を、し、士業ありと、つふはし

篤敬三寶、按、  
太子も日、御子  
の、東宮も立ふ  
がら、我、天地神  
明を棄て、佛法  
僧を敬せむと  
そ、いみじき業  
あらむや、今日  
よりして見れば、時を、天下萬姓のため、誹謗を受け、いし、も、諾ありかし、其も  
そも、後世の僧侶が、神祇を蔑如し、国脉を軽し、皇民をして醜法に惑溺せしむ  
るもの、此、不原りや、○四生、法華經功德品に、四生、卵生胎生濕生化生、○何以直  
枉、按、佛門に入て、枉と体の直るべき、理あり、此三十二年、紀にも、有僧以毆祖

二曰、篤敬三寶、三寶者佛法僧也、  
則四生之終歸萬國之極宗何世

何人非貴是法、人鮮尤惡能教從  
之、其不歸三寶、何以直枉

三曰、承詔必謹、君則天之臣、則地

之、天覆地載、四時順行、萬氣得通

地欲覆天、則致壞耳、是以君言臣

承、上行下靡、故承詔必慎、不謹自

敗、四曰、群卿百寮、以禮為本、其治

民之本、要在乎禮、上不禮而下非

齊、下無禮、以必有罪、是以君臣有

○日本紀標注卷之十八

○十二

父、續紀卅八、衆僧多非法、旨云々、註誤愚民、三代實錄廿六、沙弥善福、殺觀學  
院使、印奉、全吉、ふど、かくの如きの往々、りや、彼延曆興福の僧ら、神輿を奉て、禁  
闕を犯し、元龜天正の間、本願寺の宗徒、乱を起し、国家を腦しめたる類、擧て、盡  
しがたし、是皆、淳屠の枉と、は、よ、起るは、を、不歸三寶、何以直枉と云、る言の、當  
否も、後人能、正  
してよ、○君則  
天之臣、則地之  
云々、按、子君臣  
を以て、天地、不  
比、たる、其、理  
不、符、ひ、た、ふ、を、  
地、を、して、天を、  
覆へらしめ、た  
ふ、を、む、何、よ、比  
べむ、○上行下  
靡、平氏太子傳  
不、靡、を、效、子、作  
ら、り、○承詔必

易く法を行ふ  
才難きものか  
事理自通何事不成  
篤敬三寶、按、  
太子も日、御子  
の、東宮も立ふ  
がら、我、天地神  
明を棄て、佛法  
僧を敬せむと  
そ、いみじき業  
あらむや、今日  
よりして見れば、時を、天下萬姓のため、誹謗を受け、いし、も、諾ありかし、其も  
そも、後世の僧侶が、神祇を蔑如し、国脉を軽し、皇民をして醜法に惑溺せしむ  
るもの、此、不原りや、○四生、法華經功德品に、四生、卵生胎生濕生化生、○何以直  
枉、按、佛門に入て、枉と体の直るべき、理あり、此三十二年、紀にも、有僧以毆祖

慎不謹自敗、按  
子山猪の密勅  
を承、其のひまぐら、何ゆゑに其まをむ、行ひぬるを、其謹まざりしゆゑ、  
古今無比の大逆をむ、引出たりしあらしむや、○以禮為本云々、按子治国安民も、  
礼を以て本と為ふ、然れども、然れども、皇国敬神の大礼  
を廢て、万世安民の本を立てむとす、難き業なほべし

絶餐、原本餐を  
饗子作り、今  
平氏太子傳子  
從ふ、字書子、餐  
貪食也と注せ  
○聽讞、字書  
子讞、議獄とも、  
議罪ともあり  
○懲惡勸善、史  
記儒林傳子、勸  
善也顯之朝廷、  
其懲惡也加之

禮、位次不亂、百姓有禮、國家自治、  
之訟、一日千事、一日尚爾、况乎累  
歲、須治訟者、得利為常、見賄聽讞、  
便、有財之訟、如石投水、乏者之訴、  
似水投石、是以貧民則不知所由、  
臣道亦於焉闕、六曰、懲惡勸善、古

刑罪、漢書張敞  
傳、無以勸善  
懲惡、梁書武帝  
紀、懲惡勸善、  
宜窮其制、まど  
り、按子忠直  
の二公を害し、  
逆賊の馬子を  
扶け、其の懲惡  
勸善の憲法、  
も、恃り、其のあ  
り、其の○詔  
詐者、則為覆國  
を誡め、其の如何、  
○佞媚者、對上  
云々、此一條悉、  
太子一个の上、  
一條を、其の顯  
し、其のへ、

之良典、是以無匿人、善見惡、必匡  
其、其の諂詐者、則為覆國家之利器、為  
絕、其の人民之鋒劍、亦佞媚者、對上則  
好說下、過逢下、則誹謗上、失其如  
此人、皆无忠於君、無仁於民、是大  
亂之本也

七曰、人各有任、掌宜不濫其賢、哲  
任官、頌音則起、奸者有官、禍亂則

起念平氏太子  
 傳、起を克小  
 作、有官を在  
 官、小作、大少  
 を大小小作と  
 〇求人下、為  
 人の二字を脱  
 せ、平氏太子  
 傳、拾芥抄等小  
 よりて補ふ〇  
 靡監の監を原  
 本監小作と、  
 今平氏太子傳  
 小從、詩の唐  
 風、公事を王  
 事小作と、〇  
 信是義と、然  
 論語、不信近

繁世少生知、尅念作聖、事無大小、  
 得人必治、時無急緩、遇賢自寬、因  
 此國家永久、社稷勿危、故古聖王、  
 爲官以求人、爲人、不求官、八曰、群  
 卿百寮、早朝晏退、公事靡監、終日  
 難盡、是以遲朝不逮于急、早退必  
 事不盡、九曰、信是義、本每事有信、  
 其善惡成敗、要在乎信、君臣共信、  
 何事不成、君臣無信、萬事悉敗、十

於義言可復也  
 と云、る如く、實  
 小信と義とを  
 離して、人道  
 を行ふと、がた  
 きを、君小、信と  
 心、小、義、小、  
 して、姦賊を容  
 れ、此條目  
 小、か、以て、如何  
 〇如、鑲、無、端、平  
 氏、太子、傳、小、鑲  
 を、環、小、作、と、り  
 〇明、察、功、過、云  
 々、按、小、數、百、の  
 忠、良、を、殺、し、赤  
 持、の、賊、と、さ、へ、一、萬、頃、の、田、を、賞、し、逆、賊、を、  
 し、め、給、へ、と、あ、れ、此、時、何、ゆ、ゑ、小、賞、罰、を、明、か、せ、  
 爲、給、と、ざ、り、し、と

曰、絶念、棄瞋、不怒、人、違、人、皆、有、心、  
 心、各、有、執、彼、是、則、我、非、我、是、則、彼、  
 非、我、必、非、聖、彼、必、非、愚、共、是、凡、夫、  
 耳、是、非、之、理、詎、能、可、定、相、共、賢、愚、  
 如、鑲、无、端、是、以、彼、人、雖、瞋、還、恐、我、  
 失、我、獨、雖、得、從、衆、同、舉、十、一、曰、明、  
 察、功、過、賞、罰、必、當、日、者、賞、不、在、功、  
 罰、不、在、罰、執、事、群、卿、宜、明、賞、罰、



靡二君の靡を、  
原本非不作と  
す、今平氏太子  
傳よよて改  
む

五百歳之後、原  
本不歳と後と  
を落せり、今平  
氏太子傳、拾芥  
抄等不撰りて補  
ふ、通證不取、孟  
子之意と注せ  
るを、同書ニ由  
文王至於孔子

十二日、國司國造、勿斂百姓、國靡

二、君、民、無兩、主、率土兆民、以王爲

主、所任官司、皆是王臣、何敢與公

賦、斂百姓、十三日、諸任官者、同知

職掌、或病、或使、有關於事、然得知

之日、和如曾識、其以非與聞、勿防

公務、十四日、群臣百寮、無有嫉妬

我既嫉人、人亦嫉我、嫉妬之患、不

知其極、所以智勝於己、則不悅、才

優於己、則嫉妬、是以五百歳之後

乃令遇賢、千載以難待一聖、其不

得賢聖、何以治國、十五日、背私向

公、是臣之道矣、凡夫人有私、必有

恨、有憾、必非同、非同則以私妨公

憾起、則違制害法、故初章云、上下

和睦、其亦是情歟

公の奏せし不、  
天皇曰依奏と  
詔ひ、敏達紀にも、詔曰灼然、宜斷佛法と詔ひ、確乎たる神道を行むぞ、背私向公  
多れを、かゝる詔、不背を、四天王の像を戴き、寺塔を造り、僧尼を養ひしを、私不  
向、へて多し、○有憾、平氏太子傳、不憾を恨み作り、次あるも、おれじ、○非同を、  
同書、不非固、不作り、○上下和睦、原本睦を、諸、不作り、今平氏太子傳、不撰りて

改む○使民以時、論語不見也なり○大事不可獨斷、原本大を夫、不作也、平氏太子傳、少事を小事、不作也、從ふべし、又辭則得理、下矣、字なり、

十六日、使民以時、古之良典、故冬月有間、以可使民、從春至秋、農桑之節、不可使民、其不農、何食、不桑、何服、十七日、大事不可獨斷、必與衆宜論、少事是輕、不可必衆、唯逮論大事、若疑、有失、故與衆相辨、辭則得理、秋九月、改朝禮、因以詔之、曰、凡出入宮門、以兩手、押地、兩脚、跪之、越相、則立行、是月始定黃書

口をいふ業、まかし、古礼を

### 畫師、山背畫師

古書に往々見えて、甚古雅なをいし、宮門を出入をもとて、犬自物手突を跪き、相を越るふと、いと見苦かりり、猶礼敬の法とも、孝徳紀、天武紀等、注べし○宮門、宮衛令義解に、衛門所守謂之宮門、兵衛所守謂之閤門○黃書畫師、姓氏録に、黃文連、高麗國人、久斯那王之後也、つら、此氏人も、天武紀以後、去むく見と、とどど名義を詳る、山背畫師、平氏太子傳、不為繪、諸寺佛像、定黃文畫師、山背畫師、實、秦畫師、河内畫師、楢原畫師、と、何とも、漢人、ふて、其住める地名を、姓の如く呼習ひたり○  
銅繡丈六佛の、繡を和名抄ふ、以五色、絲、刺、萬物形狀也、沼無毛、乃と注せり、即縫物の轉、て、佛像を縫、付たり、丈六を一

麗國、大興王、聞日本國、天皇、造佛

丈六尺の像を  
 云、北史胡叟傳  
 子、沙門法成率  
 僧數千人、鑄丈  
 六、金像云々、通  
 證引々、は元  
 興寺丈六佛像光銘云、推古天皇十三年歲次乙丑、以銅二萬三千斤、金七百五十  
 九兩、敬造釋迦丈六像、銅繡二軀、并挾持等、孝德紀云丈六繡像丈六銅佛と云々  
 ○鞍作鳥、法隆寺釈迦佛像光後銘云、司馬鞍、首止利、不作、佛工、名高き人  
 みて、多須那の子あり○三百兩、拾芥抄、六銖、為一分、四分、為一兩と云々、兩を  
 コロとよめる義を、ちりず○褶、衣服令皇太子、礼服、深紫、紗、褶、義解、謂、褶者  
 所以加袴上、故、俗云袴褶、集解、謂、以婦人、裳也、褶訓、放帶也、又云、褶、着袴上也  
 とも、有り、是も、平帶の略、み、四時祭式、官人、以下、繫束、料、褶、一條と有りて、緋  
 帛、四丈と注し、天武五年、紀云、高市皇子以下、小錦以上、大夫等、賜、衣袴、褶、腰帶、及  
 杖、杖、と有り、是を、字鏡、集類、聚名、義抄、等、み、ヒ、ラ、ミ、とよめるも、鼻撥、云、腦、み、て、  
 ビを、み、呼、轉、したる、あり、然、播磨、風土、記、大神之、褶、落、於、此、村、故、曰、褶、村、今  
 人、云、比、良、美、村、と、有り、る、を見、よ、和名抄、小、褶、襲、也、覆、袴、上、之、衣、也、宇波、美、と、有  
 じ、と、色、葉、字、類、抄、ハ、ウ、ハ、ビ、り、を、即、上、帶、の、略、あ、め、と、右、ハ、お、あ、じ、例、之

像、貢上黄金三百兩、閏七月巳未  
 朔、皇太子命、諸王、諸臣、俾著、襦、冬  
 十月皇太子、居班鳩宮

壬辰八日○設  
 齋、為、拜、あり  
 ○四月八日、秋  
 氏要覽、引、  
 る、浴、佛、摩訶利  
 頭、經、云、佛、告、大  
 衆、十、方、諸、佛、皆  
 用、四、月、八、日、夜  
 半、子、時、生、所、以、  
 何、為、春、夏、之、際、  
 殃、罪、悉、畢、萬、物  
 普、生、云々、公、事  
 根、源、云、四、月、八  
 日、神、事、不、行、た  
 る、日、を、行、せ、れ  
 ず、灌、佛、の、時  
 九、日、より、御  
 神、事、を、し、め

十四年夏四月、乙酉朔壬辰、銅繡、  
 丈六、佛像、並造、竟、是日也、丈六、銅、  
 像、坐於元興寺、金堂、時、佛像、高於  
 金堂、戶、以不得納堂、於是、諸、工、人  
 等議曰、破堂、戶、而納之、然、鞍作、鳥、  
 之、秀、工、以、不壞、戶、得入、堂、即、日、設  
 齋、於是、會集、人、衆、不可勝、數、自是  
 年初、每寺、四月八日、七月十五日、  
 設齋

らる、御殿の母屋の御もんをたれて、むの御座を撤して、その跡ふ山ぐくをた  
てたる佛の、くまれぬよけしきを作て、糸ふて滝を落し、色々の作り物り云  
々、作物とも、新拾遺集ふ、灌佛の作りのみ、松ふつるの居たる、りくを、お出せ  
て、しりふふて知るべし。○七月十五日を、孟蘭會あめり、ど、正しく其事と記せ  
るも齊明三年、  
紀ふ注、べし。○  
戊午五日。○釈  
教も釈迦の教  
を云、○佛本、通  
證ふ佛像曰、幾  
本と注し、集解  
も造佛像圖本  
也。と注せ、此  
も則、字、り、ゆ  
るふ、か、る、説  
り、字、の、如、く  
見て、り、る、べし  
○大仁位も、第

五月甲寅朔戊午、勅、鞍作、鳥、曰、朕  
欲興隆内典、方將建佛刹、肇求舍利、  
利、時、汝、祖父司馬達等、便獻舍利、  
又於國無僧尼、於是汝父多須那、  
爲橘、豐日、天皇、出家、恭敬佛法、又  
汝姨嶋女、初出家爲諸尼、導者、以  
修行釋教、今朕爲造丈六佛、以求

三位ふて、冠位  
を賜ひし始末  
○南淵坂田  
尼寺、用明紀ふ  
見、る、たり。○請  
も、求、る、べし、  
舊讀マキセテ  
と、り、る、も、誤、と  
○勝鬘經、南  
史、夷、猶、傳、ふ、出  
新經勝鬘經、太  
子、傳、備、講、ふ、玉  
林抄、曰、太子所  
著勝鬘經、疏、有  
前疏、有、後疏、前  
疏、太子、三十五  
歲、所、撰、也、送、致  
于、唐朝、後、疏、獨

好佛像、汝之所獻佛本、則合朕心、  
又造佛像、既訖、不得入堂、諸工人  
不能計、以將破堂、戸、然汝不破、戸  
而得入、此皆汝之功也、即賜大仁、  
位、因以給近江國坂田郡水田二  
十町、焉、鳥、以此田爲天皇作金剛  
寺、是今謂南淵坂田尼寺、秋七月  
天皇請皇太子、令講勝鬘經、三日、  
說竟、之、是歲皇太子、亦講法華經、

傳于本朝○法華經も、妙法蓮華經と称し、普門品を加て八卷とす、深書度洗傳ふ、誦法花經毎日一遍、南史徐孝克傳ふ、持菩薩晝夜講法華經○岡本宮と通證ふ、平群郡三井岡本邑、隣于法隆寺村と注せ、今昔物語十六、大和国平群郡、鶴ノ村ニ、丑本寺ト云、入寺有りと記せり、此地多行べし、舒明紀齊明紀等不見をたる、岡本宮も、高市郡ふれむ混べりらざ○播磨国水田、法隆寺資財帳ふ、播磨国揖保郡戴相壹拾玖町壹段捌拾貳步云々○班鳩寺、上代此地を鷓村と云し、ま右云、ろろ如し、此寺の一名を法隆寺と云、色葉字類抄ふ、法隆寺縁起云、推古天皇第十五、聖德太子班鳩宮西、建一伽藍、名法隆學問寺、安置佛舍利、本朝始法華維摩會勝鬘三部、大乘於此寺、如來教法始所、故名學問寺、壬生部、仁徳紀ふ注せ、○戊子九日○曩者字書子、曩、久也

於丑本宮、天皇太喜之、播磨國水田百町、施于皇太子、因以納于班鳩寺。

十五年春二月庚辰朔、定壬生部、戊子詔曰、朕聞之曩者、我皇祖天

と注せ、○躑天踏地の四字も、文選謝平原内史表ふ見、たり、東京賦ふ躑高天躑厚地とあるを、薛綜が躑躅、恐懼之貌と注せ、夫木集十九、久方の天津、らも高れれど、せをく、めてぞ、我を世もむ○山川を、書、辭典ふ見、色々字、不て、彼を名山大川を云、ほど、是を山神、川神の意、ふて、神代紀、生山川草木、と、りるを見、るべし○陰陽も、夏冬とよむべし、日月男女の例、ふ、万葉九、常之陪、爾夏冬往哉○甲午十五日、庚戌三日○小野臣妹子記の

皇等宰世也、躑天踏地、敦禮神祇、周祠山川、幽通乾坤、是以陰陽開和、造化共調、今當朕世、祭祀神祇、豈有怠乎、故群臣為竭心、且拜神祇、甲午、皇太子及大臣、率百寮、以祭祀神祇。

秋七月、戊申朔、庚戌、大禮、小野臣

中卷下、天押帶  
 日子命者、小野  
 臣之祖也、姓氏  
 録、小野朝臣、  
 彦、津命五世、  
 孫、米餅、搗大使、  
 主命之後也、其  
 後、敏達天皇、御  
 世、大德、小野臣  
 妹子、家、于、近江  
 国、滋賀郡、小野村、因、以為、氏、式、近江国、滋賀郡、小野神社、見、ゆ、天武十三年、紀、小  
 野臣、賜、姓、曰、朝臣、○唐国、原本、大唐、小作、と、々、集解、小據、十六年、文、改、と、り、る、小  
 從、ふ、如此、大唐、と、書、ける、を、決、俗、儒、ら、り、所、為、ふ、り、と、察、ゆ、務、を、猶、連、々、改、つ、初、此  
 御代、の、十五、年、に、隋、の、煬、帝、が、大、業、に、當、る、を、唐、と、し、も、記、せ、は、る、唐、を、永、く、經  
 し、ゆ、え、支、那、国、に、當、ら、へ、る、は、と、今、も、然、る、是、を、モ、ロ、コ、シ、と、よ、め、る、を、被、地、の  
 南、方、に、關、越、路、越、南、越、粵、越、ふ、ど、り、て、是、を、惣、て、百、越、と、も、諸、越、と、も、云、其、諸、越、  
 と、諸、越、と、よ、み、と、り、て、支、那、国、一、圓、の、惣、名、云、及、が、せ、は、る、越、は、皇、国、より、近、ゆ  
 る、あり、故、に、孝、德、紀、に、西、土、を、も、モ、ロ、コ、シ、と、よ、み、た、る、○通、事、も、雄、略、紀、に、譯、語、

妹子、遣、於、唐國、以、鞍、作、福利、為、通  
 事、是、歲、冬、於、倭、國、作、高、市、池、藤、原、  
 池、肩、置、池、菅、原、池、山、背、國、掘、大、溝、  
 於、粟、隈、且、河、内、國、作、戶、蒨、池、依、網  
 池、亦、每、國、置、屯、倉

卯安那と、り、る、処、に、注、し、つ、○高市池藤原池を、共、小高市郡、み、り、る、○肩岡池、志  
 小葛下郡葦田池在王寺村云々、一名片岡池○菅原池を、添下郡、み、り、る、○粟隈  
 仁德紀に注しつ○戸蒨池、河内志に、古市郡戸蒨池、一作利雁、  
 今、名、利、雁、戸、在、藏、内、村、○依網池、河内志に、在、丹、北、郡、池、内、村、  
 蘇因高も、小妹子  
 子と、呼、誤、た、る  
 あり、松苗を、国  
 史略に、蘇我妹  
 子に、記、せ、は、る、  
 非、あり、○裴世  
 清、北史九十四  
 皇国、の、よ、と、を  
 記、せ、る、処、に、上  
 遣、文、林、郎、裴、世  
 清、使、倭、國、と、り  
 難波高麗  
 館、舒、明、紀、に、脩、理、難、波、大、郡、及、三、韓、館、と、り、る、攝、津  
 志、東、生、郡、條、に、三、韓、館、在、安、国、寺、坂、上、と、記、せ、る、

十六年夏四月、小野臣妹子、至、自  
 唐國、唐國號妹子、臣、曰、蘇因高、即  
 唐國、使人裴世清、下客十二人、從、  
 妹子、臣、至、於、筑紫、遣、難波、吉師雄  
 成、召、唐客裴世清等、為、唐客、更、造  
 新館、於、難波、高麗館、之上

丙辰十五日○  
江口舒明紀小  
も唐国使人高  
表仁等到于難  
波津則遣大伴  
連馬養迎於江  
口云々大河内  
直矢伏為導者  
到館前續紀廿  
二子高麗使云  
々到着難波江  
口同廿四子遣  
唐使駕船一隻  
自安藝國到難  
波江口按江  
口とて淀川の  
江口にて今大坂中嶋邊ありしとわがし到館前とありしを見ればし然る大阪  
より二里許上淀川に傍て江口村あり朝野群載に記せば遊女記に江河南北

六月壬寅朔丙辰客等泊于難波  
津是日以飭船三十艘迎客等于  
江口安置新館於是中臣宮地  
連磨呂大河内直糠手船史王平  
為掌客爰妹子臣奏之曰臣參還  
之時唐帝以書授臣然經過百濟  
國之日百濟人探以掠取是以不  
得上

邑々處々分流通河内國謂之江口云々扶桑略記治安三年條云指江口御之間  
遊行之女松波來歌曲參差多とあり右云々江口村もありあり同名二  
所あり混べありを○中臣宮地連姓氏録に宮處朝臣大中臣朝臣同祖天兒  
屋根命之後也とあり此氏人も續紀十三に中臣宮處連東人て人見せたる  
のみ此二十年紀に中臣宮地連鳥摩侶とありも同人にて此不鳥字を脱せる  
りも元より別人り詳ありぞ此宮地を中臣宮處氏本系帳にミヤコトよめ  
るを同書考證に記しつ○大  
河内直雄略紀に見せたり  
失大國之書妹  
子に彼地に往  
しるを隋書八  
十一に記して曰  
大業三年其王  
多利思比孤遣  
使朝貢使者曰  
聞海西菩薩天  
子重興佛法故  
遣朝拜兼沙門

於是群臣議之曰夫使人雖死之  
不失旨是使矣何怠之失大國之  
書哉則坐流刑時天皇勅之曰妹  
子雖有失書之罪輒不可罪其大  
國客等聞之亦不良乃赦之不坐

數十人來、學佛也  
法、其國書曰、日

出處天子致書、日没處、天子無恙云々、帝覽之不悅、謂鴻臚卿曰、蠻夷書有無禮者、勿復以聞、記せ、後、有無禮と指せ、此文と無恙云々と忌みて云、消、より、然、を大方の人と無礼の語を傳、ざるを、より、日出處天子と、其、不當、より、と思へるも、德漏あり、皇國古來礼を以て、隣國に交、ゆ、夷狄の主を、日没處天子と告、下、も、東天皇敬白、西皇帝と、但、敬、字、太子の私、加たる、平氏太子傳、不見、心、我固有の理を以て、論、お、大日本天子、致書、隋王と書、べ、や、い、ふ、と云、不、吾を天地無窮の天子、彼、周の賊臣、楊堅、子、お、む、あり、其、若、真、怒、て、咎、め、し、あり、む、お、放、還、と、る、べき、よ、十數人、を附、て、大、切、不、殊、子、を、送、來、し、し、を、見、よ、言、と、情、と、大、反、對、せ、る、を、や、初、又、失、書、と、を、按、し、真、不、失、切、し、不、を、り、ら、じ、報、書、不、無、礼、の、語、を、ど、り、る、を、惡、く、て、棄、し、よ、や、初、皇、國、より、外、夷、に、使、を、遣、す、交、を、厚、せ、し、も、太子の私意より出、て、海外、に、國、辱、を、遣、せ、る、を、宇、多、天、皇、寬、平、五、年、に、至、り、來、朝、を、受、け、遣、唐、を、停、め、し、し、を、全、管、神、の上、表、し、よ、り、其、る、管、家、文、藻、に、見、え、たり、初、此、件、の、を、神、皇、正、統、記、神、代、之、段、に、推、古、天、皇、の、御、時、も、ろ、お、し、の、隋、朝、より、使、り、り、て、書、を、お、く、れ、し、し、不、倭、皇、と、かく、聖、德、太、子、み、づ、う、ら、筆、を、と、り、て、返、牒、を、書、な、し、し、し、不、東、天、皇、云、々、按、し、不、此、不、彼、國、の、使、人、が、持、來、し、し、書、不、皇、帝、問、倭、皇、と、り、し、む、返、牒、不、東、天、皇、敬、云

々、太子が敬、字、を、加、ね、る、を、天、威、を、敗、奉、り、名、分、を、弁、だ、は、書、法、あり、且、此、不、彼、國、を、大、國、と、書、り、は、も、理、お、し、撰、者、慕、漢、の、私、を、ぞ、か、し

癸卯三日、飭、秋八月、辛丑朔、癸卯、唐客入京、是

日遣、飭、騎、七十五、足、而、迎、唐客、於

海石榴市、額田部、連比羅夫、以

告、禮、辭、馬、壬子、召、唐客、於、朝、庭、令

奏、使、旨、時、阿倍、鳥、臣、物、部、依、網、連

抱、二、人、爲、客、之、導、者、也

と云、雲珠、和名抄、宇須、今、按、雲母、之一、名、也、爲、馬、飭、未、詳、杏葉、伊、俣、良、俗、云、行、衣、布、と、注、せ、り、う、ら、と、李、葉、を、杏、葉、の、誤、り、あり、續、紀、卅、四、に、始、列、諸、王、裝、馬、無、蓋、者、於、諸、臣、有、蓋、之、下、又、曰、令、五、位、已、上、進、裝、馬、及、走、馬、と、り、ら、裝、馬、も、お、多、じ、○、海、石、榴、市、を、武、烈、敏、達、用、明、等、の、紀、に、見、え、たり、○、壬、子、十、二、日、○、阿、倍、鳥、臣、を、下



子阿倍鳥子、臣子作也、又阿倍内、臣鳥子作也、同人有、○物部依網連抱、姓氏録、依羅連、饒速日命十二世孫、懷大連之後也、又物部依羅連、神速日命之後也、とも阿倍氏、人々下、物部依網連乙等と見、延、續

紀十一、物部依羅連人會、賜朝臣、姓とも有り

皇帝問倭皇云々、平氏太子傳、**於是唐國之國信物、置於庭中、時**

太子奏曰、天子賜諸侯王書、**使主裴世清、親持書、兩度再拜、言**

式也、然、皇帝之、**上使、旨而立之、其書曰、皇帝問倭**

用倭皇、字、彼有、**皇、使人長吏大禮、蘇因高等、至具**

其禮、應恭而修、**懷、朕欽承寶命、臨仰區宇、思弘德**

と、云、るも、いみじき、妄言あり、**化、覃被含靈、愛育之情、無隔遐邇**

云、を、甘、じ、たる、**知、皇介居海表、撫寧民庶、境內安**

太子の心社、いぶりし、れ、真、**樂、風俗融和、深氣至誠、遠脩朝貢**

倭皇と書む、む、**丹、欸之美、朕有嘉焉、稍暄比、如常**

公平ありむ、を、**也、故遣鴻臚寺、掌客裴世清等、稍**

太子が国辱を、**宣、徃意、并送物、如別**

忘と、親王が、**を傳、たるふ、**

永世無礼の文、**○含靈、通證、謂有情也、と、云、るが如し、○介居、原本命居、誤り、**

今、秋、紀、不、披、る、**○脩朝貢、按、何を畏、て、貢を脩、め、む、か、る、無礼の來書を**

む、何、故、不、破、り、**を、際、し、め、し、も、諾、あ、ら、む、や、○鴻臚寺、史記、叔孫通傳、大行、設、九賓、臚、句、傳、注、**

掌、賓、客、之、禮、今、謂、之、鴻臚、也、**掌、賓、客、正、九、品、上、掌、東、夷、**

唐、六、典、云、鴻臚、寺、掌、客、正、九、品、上、掌、東、夷、**西、戎、前、蠻、北、狄、歸、化、在、蕃、者、之、名、數、云、々、**

金、華、也、金、を、**時、阿倍、臣、出、進、以、受、其、書、而、進、行、**

以、て、花、葉、を、造、**○日本紀標注卷之十八**

とて、髻華も上  
ふ于、彌の訓注  
りて、彼所小  
注、るが如し、北  
史九十四、皇國  
の海とを記せ  
体、但、頭亦無  
冠、但、垂髮於兩  
耳上、至階其王  
始制冠、以錦綵  
為之、以金銀、鏤花為飾、と、  
當より、○錦紫以下字の如し、○綾羅を、天武紀ハタとよめ、羅を常小  
ウスモノとよめ、薄服ぞ古言あるべき、儀式大嘗祭儀、赤、薄機引、下裳一  
腰と、何ぞ、此も舊讀の、ハタと、二物不見はべし、○用冠色七、十一  
年、紀ハ、以當色、絶縫之と、  
を併見るべし、○丙辰十六日  
乙亥五日、○大  
郡、欽明紀ハ注

大伴齧連、迎出承書、置於大門前  
机、上、而奏之、事畢、而退焉、是時皇  
子、諸王、諸臣、悉以金髻華著頭、亦  
衣服皆用錦紫、繡織及五色綾羅、  
一云、服色、  
丙辰、饗唐客等、於朝

セマ、○吉士雄  
成也、十六年、紀  
ハ、難波吉師雄  
成と、  
利の上、  
を脱セマ、○敬  
白西皇帝の敬  
字も省、  
太子の加、  
と、太子傳曆  
ハ、見を、  
文中、  
又謹白、  
太子の執筆  
ハ、  
代より、  
親ミテ、  
と云、

大郡、辛巳、唐客裴世清罷歸、則復  
以小野妹子、臣、為大使、吉士雄成  
為小使、福利為通事、副于唐客、而  
遣之、爰天皇聘唐帝、其辭曰、東天  
皇、敬白西皇帝、使人鴻臚寺、掌客、  
斐世清等至、久憶方解、季秋薄冷、  
尊何如、想清念此、即如常、今遣大  
禮、蘓因高、大禮乎、那利等往、謹白  
不具

て、万葉ふも、父、命妻、命ふど見とれむ、此尊も  
其意ふもべし。○乎那利と難波、昔師雄成を云

奈羅譯語と姓  
みて續紀卅四

み、攝津佐、河内  
等三人、馬、姓長

岡忌寸、姓氏録  
み、長岡、忌寸、巳

智同祖とあり  
て、巳智と秦、太

子胡亥之後也  
と、見とたり

高向漢人玄理、  
姓氏録み、高向

村主、魏武帝、太子、文帝之後也とも、吳国、人小君王之後也とも記せ、高向は河  
内国錦部郡より、出たる姓なり、同郡に高向村あり、漢人なりあるべし、高安、漢人

葦屋、漢人ふど多あり、孝徳天皇前紀み、高向、史玄理、為国博士、同大化二年、紀み、  
小徳高向、博士黒麻呂、更名玄理、同白雉五年、紀み、大錦上高向、史玄理とあり、此

是時遣於唐國學生倭漢直福因、  
奈羅譯語惠明、高向漢人玄理、新  
漢人大國、學問僧、新漢人日文、南  
淵漢人請安、志賀漢人惠隱、漢人  
廣齊等、并八人也、是歲新羅人多  
化來

玄理を、クロマサとも、クロマロともよめども、黒麻呂と一名み、玄理と新紀  
み音讀とつはみ従ふべし。○新漢人を、イマキノヒトとよめども、新の一字を  
イマギとよむを、雄略紀み、新漢、槻本、新漢、陶部、み、見ゆ、是を或も今來ふ作  
とほむなり、正字あはべし。○南淵も、大和国高市郡の地名。○志賀も近江国の  
郡名なり、又大和国吉野郡み、志賀村あり、孰ありむ。○漢人も姓氏  
録み、百濟国人多夜加之後也とあり、此氏人史ふとく見とたり

庚子四日○筑  
紫大宰、和名抄

み、大宰府、於保  
美古止毛知乃

司、又筑前国太  
宰府、並国府在

御笠郡、職員令  
み、太宰府、帶筑

前国主神一人  
掌諸祭祠事、帥

一人掌祠社戸  
口簿帳、字養百

大宰奏上言、百濟僧道依、惠彌爲  
首、一十人、俗人七十五人、泊于肥  
後國葦北津、是時遣難波吉士徳  
摩呂、舩史龍、以問之、曰、何來也、對  
曰、百濟王命、以遣於吳國、其國有

姓勸課農桑、紀 蔡所部貢舉孝  
義云々、僧尼名  
籍蕃客歸化饗  
譙事云々、初太  
宰ハ、此子見初  
て後、孝徳天皇大化五年、拜日向、臣於筑紫大宰、帥ふどりしと、其まかのづら其始の、浅らるふこそ、宣化元年、紀ふ筑紫国者、遐邇之所朝、屈之所關門、是以海表之國、候海峽、以來賓望、天雲而奉貢云々、脩造官家、那津之口と、つるぞ、彼府の始、あるべき、那津と齊明紀、不注、べし。○首も長を云、○俗人も白衣ふて、僧を墨、漆し云、ふ、對たるふ  
○葦北も、景行紀、不注、せ  
壬午十六日、○  
道人も行人も  
智度論、ふ、得  
度者名、為道人  
餘、出家者、未得  
道者、亦名道人

亂不得入、更返於本郷、忽逢暴風、  
漂蕩海中、然有大幸、而泊于聖帝、  
之邊境、以歡喜

五月丁卯朔壬午、德摩呂等復奏  
之、則返德摩呂龍二人、而副百濟  
人等、送本國、至于對馬、以道人等

原本十人を十  
一ふ誤りて、今  
改む○福利も、  
鞍作、福利を云、  
○五經、繼體紀  
ふ見、在た  
彩色、神功紀、  
見、と、神功紀、  
五色、絲、縮、と、  
と、む、彼、處、不、注  
し、つ、○紙、墨、云  
々、紙、も、楮、より  
出、た、は、名、墨、と  
漆、も、出、た、る  
名、あり、り、ひ、其、製、を、今、も、あ、ら、じ、か、り、し、み、や、唐、書、二、百、二、十、皇、國、の、六、と、を、記、せ  
る、處、不、其、紙、似、爾、而、澤、人、莫、識、と、り、を、初、此、み、見、を、た、る、紙、墨、も、其、起、原、を、云、ら、ふ、  
そ、ら、け、高、麗、僧、が、其、を、製、る、ふ、巧、あり、と、云、を、記、せ、は、の、み、か、く、て、明、治、の、始、豐  
後、因、より、上、記、と、云、書、を、搜、出、し、其、後、或、人、抄、譯、し、て、云、楮、澁、高、彦、根、命、人、發、明、シ

十人皆請之、欲留、乃上表而留之、  
因令住元興寺、秋九月、小野臣妹  
子、至、自唐國、唯通事福利不來  
十八年春三月、高麗王貢上僧曇  
徴、法定、曇徴、知五經、且能作彩色  
及紙墨、并造碾磴、蓋造碾磴、始于  
是時歟

タル紙ヲ作り、水押墨命人發明シタル墨ヲ製シ、去年立ノ竹ヲ割テ、泥中ニ漚  
ス八日、其先ヲ叩キ、筆ヲ作りテ、コレヲ書記ス、又曰木曾山ノケキヲ伐シメ、コ  
レヲ焚テ、其凝烟ヲ取り、ヒムノ葛ノ油ヲ交ヘ、墨ヲ製ス、ト記セられ、此も偽書  
ありと申ラズ、○礮礮も、水白ふて、水車にて作らばを云、職員令主税寮の義解  
曰礮、天智紀ト造水礮而治鐵  
沙礮部も、居所  
ウ名あはべし

○奈末、官名  
マ、上ト注セリ  
○竹世士、原本  
士を土ト作リ  
マ、今紀紀及下  
ト引リ、ト注セリ  
○大舍、隋書新  
羅傳ト、其官有  
秋七月、新羅、使人沙唎部、奈末竹  
世士、與任那、使人、唎部大舍首智  
買、到于筑紫、九月遣使、召新羅任  
那、使人、冬十月己丑朔丙申、新羅  
任那、使人、臻於京、是日命額田部  
連比羅夫、為迎新羅、客莊馬之長

十七等ト、  
中ト、大舍ト十  
二等ト、當ト、  
○首智買ト、名  
○丙申八日、○莊馬、上ト、  
莊を莊ト作リ、俗字あり、○阿斗、敏、連、絶、ト注セリ  
丁酉九日、○間  
人連、舊事紀ト、  
天、玉櫛彦命、間  
人、連、等、祖、姓氏  
録ト、間人、宿禰、  
神魂命五世孫、  
玉櫛比古命之  
後也、天武十三  
年、紀ト、間人、連  
賜、姓、曰、宿禰、  
昨、連、上ト、  
ト作リ、  
○豐  
以膳臣大伴、為迎任那、客莊馬、之  
長、即安置阿斗、河邊館  
丁酉、客等拜朝庭、於是命秦、造河  
勝、土部、連、菟、為新羅、導者、以間人、  
連、塩、蓋、阿閑、臣、大籠、為任那、導者、  
共引、以自南門、入之、立于庭中、時  
大伴、昨、連、蘇我、豐浦、蝦夷、臣、坂本、  
糠手、臣、阿倍、鳥子、臣、共、自位起之

浦蝦夷、馬子の子、法王の帝、説ふ、蘇我、豊浦、毛、人、み作と、高市郡、み作、豊浦、み、由、つ、て、名、づ、け、し、み、や、○大臣、も、馬子、と、云、○乙、巳、十七、日、○河内、漢、直、天、武、十、二、年、紀、み、川、内、漢、直、賜、姓、曰、連、同、十、三、年、紀、み、賜、姓、曰、思、寸、○共、食、者、も、相、宴、人、の、略、あ、る、こ、と、雄、略、紀、み、注、せ、は、づ、と、○辛、亥、廿、三、日、五、月、五、日、も、例、み、よ、ら、む、乙、酉

進、伏、于、庭、於、是、兩、國、客、等、各、再、拜、以、奏、使、旨、乃、四、大、夫、起、進、啓、於、大、臣、時、大、臣、自、位、起、立、廳、前、而、聽、焉、既、而、賜、祿、諸、客、有、差、乙、巳、饗、使、人、等、於、朝、以、河、内、漢、直、贄、爲、新、羅、共、食、者、錦、織、首、久、僧、爲、任、那、共、食、者、辛、亥、客、禮、畢、以、歸、焉、十九、年、夏、五、月、五、日、藥、獵、於、兔、田

朔、巳、丑、と、り、る、べ、き、あり、然、る、み、支、干、を、記、さ、い、る、も、ゆ、え、を、あ、く、古、書、の、終、を、傳、た、る、あり、○藥、獵、を、鹿、の、若、角、を、採、む、と、め、あり、若、角、を、鹿、茸、を、云、万、葉、十、六、小、四、月、與、五、月、間、爾、藥、獵、仕、流、時、爾、○免、田、野、と、大、和、国、宇、陀、郡、の、野、と、○藤、原、池、と、大、和、国、高、市、郡、み、つ、と、○粟、田、細、目、臣、の、細、目、と、名、あり、姓、氏、録、み、粟、田、朝、臣、天、足、彦、国、忍、人、命、之、後、也、天、武、十、三、年、紀、み、粟、田、臣、賜、姓、曰、朝、臣、○部、領、按、み、相、撲、防、人

野、取、鷄、鳴、時、集、于、藤、原、池、上、以、會、明、乃、往、之、粟、田、細、目、臣、爲、前、部、領、額、田、部、比、羅、夫、連、爲、後、部、領、是、日、諸、臣、服、色、皆、隨、冠、色、各、著、髻、華、則、大、德、小、德、並、用、金、大、仁、小、仁、用、豹、尾、大、禮、以、下、用、鳥、尾、秋、八、月、新、羅、遣、沙、喙、部、奈、末、北、叱、智、任、那、遣、習、部、大、舍、親、智、周、智、共、朝、貢

等小部領使の令、コトリヅカヒとよめ、通證不執事之義と云、○用金も、金を以て花小はれ、何小まれ作て、神頭ともはを云、○豹尾、欽明紀不注しつ新羅、下、原本遣を遣不誤とり、○習部

丁亥七日、○置酒、大御酒食、二十一年春正月、辛巳朔丁亥、置酒

宴群卿、是日大臣上壽歌曰、夜須

志斯和餓於朋、弥志斯和餓於朋、耆弥能也、仁德紀小見とたり

○訶句理摩須、摩須阿摩能、椰蘇訶礙、異泥多多

由布比能比賀、須弥蘇羅烏弥禮磨

氣流美夜とり、賀氣流小おとじ、カケルも、カクルも、輝の古言ふて、大君の御稜威の輝くと云て、其輝を天の八十影小云、移せるて高天原尔千木高知と云、如く、上て千木の高くと云て、即高く知食と、上下を兼ねる古文の一格あり、大枝、詞小天之御蔭、日之御蔭止、隱坐、云々龍田風神祭詞小、朝日乃日向處、夕日乃日隱處と

り、隱も、共小、借字ふて、此と專同義ふるを、考及後叙等小字の如く、隠るとやうに説るも、古義を失へ、○阿摩能椰蘇訶礙も、天之八十影ふて、天日を申し、八十とて御光の周、満足りひたる意あり、○異泥多多須

と、出立の延語、○弥蘇羅烏弥禮磨と、真空を見者あり

豫呂豆余珥也、萬代ふて、天津

日の照し、眞空の、万代も

か、あり、○訶句

志茂餓茂も、如

此も欲得ふて、伽陪摩都羅武、宇多豆紀摩都流

志と助辞あり、○知余珥茂也、千代ふもあり、○訶句志茂餓茂も、上ふおあじ、原

木次小知余珥茂、訶句志茂餓茂の二句、何と類聚、国史小无、小抑りて、刪る、○訶之

胡弥豆も畏て、あり、○兔伽陪摩都羅武も、仕、奉むあり、○鳥呂餓弥豆も、持、而小

て、呂も助辞あり、即折屈の略、○兔伽陪摩都羅武も、上小出、○宇多豆紀摩都流

と、勞奉ふて、謹勞の意あり、初阿行の伊を、偃ふ通とし、云、る例も、愛、ミを、ウツク

シ、ミ、牆、薇を、本草和名小、宇波良と注せ、休、グ、如し、然、小、是を、宴と、云、て、ツキ、酒





后氏之送葬也  
用明器云々明

器、鬼器也、禮、禮  
弓、弓、明器、神

明之、大全、以、  
神明之道待之、

也、注、明、衣、  
也、注、明、衣、

也、注、明、衣、  
也、注、明、衣、

也、注、明、衣、  
也、注、明、衣、

也、注、明、衣、  
也、注、明、衣、

也、注、明、衣、  
也、注、明、衣、

也、注、明、衣、  
也、注、明、衣、

以境部臣摩理勢令誅氏姓之本

矣時人云摩理勢鳥摩侶二人能

誅唯鳥臣不能誅也

也注明衣也注明衣也注明衣也注明衣也

也注明衣也注明衣也注明衣也注明衣也

也注明衣也注明衣也注明衣也注明衣也

也注明衣也注明衣也注明衣也注明衣也

也注明衣也注明衣也注明衣也注明衣也

也注明衣也注明衣也注明衣也注明衣也

也注明衣也注明衣也注明衣也注明衣也

也注明衣也注明衣也注明衣也注明衣也

也注明衣也注明衣也注明衣也注明衣也

也注明衣也注明衣也注明衣也注明衣也

也注明衣也注明衣也注明衣也注明衣也

也注明衣也注明衣也注明衣也注明衣也

也注明衣也注明衣也注明衣也注明衣也

也注明衣也注明衣也注明衣也注明衣也

也注明衣也注明衣也注明衣也注明衣也

也注明衣也注明衣也注明衣也注明衣也

○羽田  
履中紀注せ

○兔田之獵  
十九年紀

見ゆ○白癩和  
名抄ふ白癩人

面及身頸皮肉  
色變白亦不痛

疾者也之良波  
太三代實錄十

三小六人部由  
貴繼生白人男

女二人肌膚髮  
髮眉眼舉身純白

說同類小解り  
り、されど大被詞

名義抄等小、  
贏をクブサと注

說文小贏有餘  
賈利也と注せ

嶺山齊明紀  
小甘構丘束之

身皆班白若有白癩者乎惡其異

獵是歲自百濟國有化來者其面

相連參趣於朝其裝束如兔田之

夏五月五日藥獵之集于羽田以

於人欲棄海中嶋然其人曰若惡

臣之班皮者白班牛馬不可畜於

國中亦臣有小才能構山岳之形

其留臣而用則為國有利何空之

弄海嶋耶

於是聽其辭以不弄仍令構須彌

山形及吳橋於南庭時人號其人

盧山、四寶合成  
在大海中、注す

曰路子、工、亦名芝耆摩呂

唐言妙高山、舊曰須彌、又曰須彌婁、長阿含經云、四洲地心即須彌山云々、此山の  
ふとを翻譯名義集衆山篇云、東黄金南琉璃、西白銀北頗梨、高三百三十六萬里  
ふと、虚を築立て山を造れ、○吳橋、高反、たる橋を云、枕草紙云、川のふとふ  
どお、そろしきみ、人どもしとのが、ありして云々、まうじと曙抄、困と注せ  
て、○路子、其人の名、○芝耆、摩呂、醜麻呂あり、万葉十三  
子、少屋之四忌、屋とも、鬼之四忌、手とも、り、醜屋、醜手あり

伎樂傳、天武紀  
云運川原寺、伎

又百濟人味摩之、歸化曰、學于吳

樂於築紫、職員  
令雅樂寮、伎

得伎樂傳、則安置櫻井、而集少年

樂師一人、掌教  
伎樂生、其生、以

令習伎、樂傳、於是真野首弟子新

樂戶為之、腰鼓  
生准之、義解、不

漢齊文、二人習之、傳其傳

謂吳樂、其腰鼓亦為吳樂之器也、和名抄云、腰鼓、久礼豆々美、今吳樂所用是也、續  
紀十七子、吳樂五節、田傳云々、後漢書百官志云、太子樂令一人、六百石云々、掌伎

樂、按、不伎、字をよめる、海外の樂も吳より、先あるものあり、○櫻井  
も、崇峻紀、櫻井寺、り、彼、処、注せ、○真野首弟子、姓氏録云、真野造、百濟  
国人、速古王之後也

披上池、大和志  
不在葛上郡井  
戸村、此地のこ  
と、神武紀、孝靈  
紀等、不見、臣、持  
統紀、不腋上、腋  
と、り、○畝  
傍池、大和国高  
市郡、不、り、○  
和珥池、大和志  
不、在、添上郡池  
田村、廣一千五  
百畝云々、此地、神武紀、崇神紀等、不見、臣、た、○置大道、按、此御世の京も、大和  
国高市郡小墾田、あり、後、大、道、今、の、竹、内、街、あり、○片岡、大和国葛下郡、不、り、

二十一年、冬十一月、作披上池、畝  
傍池、和珥池、又自難波、至京、置大  
道、十二月庚午朔、皇太子遊行於

片野、時、飢者卧道、垂、仍問姓名、而  
不言、皇太子視之、與飲食、即脱衣

裳、覆飢者、而、言安卧也

○道垂も道傍ふて邊垂の垂ふおふじ○飲食も食物ふて神功紀ふ、阿佐孺鳩齊とつるふ注せり

斯那提流、万葉九不、級照片足、羽河ともつる、冠辞考ふ、級立る物と、斜子片

多比等阿波禮、摩爾、伊比爾、惠豆、許夜勢、屢諸能

て、片ともへくくるふらむと云るふ従ふふし、級とも段々疊とは意あはれも、坂

を云る○箇多鳥箇夜摩爾も片岡山ふに、葛下郡片岡莊、今泉村ふ其趾つる

と志ふ記せり○伊比爾惠豆も飯ふ飢ての略あり○許夜勢屢も臥在ふて、記

の上巻ふ、美蕃登見、疾而病臥在、万葉九不、奥津城爾妹之臥勢流まじ多し○諸

能多比等も、其旅人の略あり、是も後の格ふよりむ、タビトと濁る

べきを、上代も清音ふ云る、能考ふべし○阿波禮も歎息の辞、於夜那斯爾も

親無ふあり○須陀氣能、祇彌波夜那祇伊比爾

夜も、汝將成哉、あり、汝も古言ふも、ナと云る

ら多ま多ど、万葉十四不、奈禮毛安禮毛とつる、汝も吾もあり、初此も汝も如此成りむやを迷ふて疑へり○

佐須陀氣能、冠辞考ふ、立竹のくみと云を、轉して君といひかけ、君といひかけし

より、君の身す宮ふも、冠らもはまるべし、記す夜久毛多都を、万葉ふ八雲刺と

つるも、初も立もおふじと云る○祇彌波夜那祇も、君もや無さふて、君も無さや

の意あり○伊比爾惠豆、以下上下ふおふじ、初此飢人を、達磨の化身のやうふ、傳

たるを思ふふ、万葉三の挽歌ふ、上宮聖德皇子、出遊竹原井之時、見龍田山、死人、

悲傷御作歌一首、家有者、妹之手將、纏草枕容爾、臥有此旅人、何、怜、とつるを、因ふ

して、其世ふ在りし好事のとの、此哥をむ作たるふも、つらじ、う、猶次ふ云、を見よ○辛未二日

辛未、皇太子遣使、令視飢者、使者還來之曰、飢者既死、爰皇太子大

墓固封、日本靈異記ふ、崗本村

法林寺東北角  
有守部山作墓  
而收名曰人木  
墓云々○近習  
下原本先字の  
マ、軟紀小无キ小  
従ふ○真人史記始皇紀小、真人者入水不濡、入火不焚、淮南子小能反其所生、若  
未有形、謂之真人云々、是を中昔の書不達磨とも、文珠とも記せ、徳へて太子を  
非んと云、むため、偽作  
して、傳、た、見ゆ

見屍骨云々、北  
史陸法和傳小、  
令開棺而視之、  
空棺而已、  
る、彼、処、の、妄  
傳、  
小、達磨、  
於熊耳山、後三

也、數日之後、皇太子召近習者、謂  
之曰、先日卧于道、飢者其非凡人  
爲必真人也、遣使令視

於是使者還來之曰、到於墓所而  
視之、封埋勿動、乃開以見屍骨、既  
空、唯衣服置棺上、於是皇太子  
復返使者、令取其衣、如常且服矣、

歲末雲奉使西  
域、遇師於葱嶺、  
頭、手携雙履、西  
歸、  
復命具奏其事、魏帝命塔、  
撰者の親王も、かゝる類をむ棄たまふ、す穴ゆゝしや、後の學者よく弁ふべし

時人大異之曰、聖之知聖、其實哉

五日、  
壬寅ありと、支  
干、改、  
あ、上、注し

逾惶

つ○巳卯十三  
日○犬上君御

二十二年、夏五月五日、藥獵也、六

田、  
稻、  
君、  
族、

月丁卯朔巳卯、遣犬上君御、田、

田、  
稻、  
君、  
族、

矢田部造御孀、於唐國、秋八月大

田、  
稻、  
君、  
族、

臣卧病、爲大臣而男女、并、一千、人

田、  
稻、  
君、  
族、

出家

り、原本君字を脱せ、舒明紀小犬上君三田部、舊事紀小、犬上君御、田、  
子、  
子、  
子、

し關名の二字を加たり、舊事紀に詔大仁矢田部、御嬬連、改姓命造、則遣大唐使、復大禮犬上、君御田、爲小使、と有り、ふよりて補つ、次あるもおふじ、嬬を景行紀に免摩の訓注有り

庚寅二日○癸卯十一日

二十三年秋七月、犬上、君御田、歟、矢田部、造御嬬、至自唐國、百濟、使、則從犬上、君而來朝、十一月巳丑朔、庚寅、饗百濟、客矣、癸卯、高麗僧、惠慈、歸于國

桃李實の、實て華の誤り、○掖玖、式、大隅國、馭謨郡、益救、神社有り、馭謨郡、本國を距百

二十四年春正月、桃李實之、三月、掖玖、人三口、歸化、夏五月、夜句、人七口、來之、秋七月、亦掖玖、人、二十

二十里、西南海中、小存て、周匝

口來之、先後并三十人、皆安置於

百二十六里、今も屋久嶋と云

朴井、未及還、皆死焉、秋七月、新羅、

此嶋より良杉を産し、世に

遣奈未竹世士、貢佛像

屋久、杉と稱し、和名抄に、錦貝、夜久乃、玳貝、儀式大嘗祭儀及新猿樂記等、夜久、則ちど見をたるも、此嶋より出せり、初上代掖玖と云し、今、今の屋久、み有りて、琉球國を指せり、其も近き地名を遠く云及、木を例ふて、加羅國を海外諸蠻、云、わろ、けたるが如し、續紀一、多禰、夜久、菴美、度感と有り、今、今の屋久、嶋あり、○夜句も掖玖、ふて、字を易たるのみ、○朴井、和泉志泉南郡、條、小、榎井池、在、西内、村、と記せれ、此地、姓、小、孝、德、紀、小、朴、井、連、押、坂、を、め、往、々、見、返、た、る、も、此、地、より、起、れ、る、小、や、○神、戸、

二十五年夏六月、出雲國言於神

郡、和名抄出雲

戸郡有瓜、大如、是歲五穀登之

郡等、小、神、戸、郷、何、と、ど、郡、名、小、神、門、何、り、て、加、無、止、と、注、せ、踐、む、是、り、○如、瓜、和、名、抄、小、盆、瓦、器、也、謂、之、牟、比、良、加、俗、云、保、止、岐、主、計、式、小、盆、三、口、受、五、斗、盆、二、口、受、三

斗、新撰字鏡、金盆盃、瓶、甕、  
等の諸字を、保止支と注せり

隋煬帝、隋書  
小字阿摩高祖

第二子也、何  
此王の大業

八年正月、條、  
親、總六師用申

九伐、云々、一百  
一十三萬三千

八百、號、三百萬、  
其饒運者倍之、

同三月、條、  
九軍並隋將帥奔還云々、

此年、我天皇二十年、  
大方の大數、

實、二十萬許と察せつるを、  
彼国人の虚數を云、

昔より是のみあらざ、  
注し軍防令、

發弩拋石、  
義解、

拋者猶擲也、  
和名抄、

檜、建大木、  
置石其上、

發機以投敵也、  
和名以之波之岐

是年、遣河邊臣、  
關、

於安藝國、  
令造

船、至山、  
覓材、

便得好材、  
以名將

伐、時有人曰、  
霹靂木也、

不可伐、  
河邊

臣曰、  
其雖

二十六年、秋八月癸酉朔、高麗遣  
使、貢方物、因以言、隋煬帝興三十

萬、衆、攻我、返之、爲我所破、故貢獻  
俘虜、貞公、普通二人、及鼓吹、弩拋

石之類、十物、并土物、駱駝一疋、

是年、遣河邊臣、關、於安藝國、令造

船、至山、覓材、便得好材、以名將

伐、時有人曰、霹靂木也、不可伐、河

邊、臣曰、其雖、雷神、豈逆皇命、耶、多

祭幣、帛、遣人、夫、令伐、則大雨、雷、電

之、爰、河邊、臣、案、劔、曰、雷神、無、犯、人

夫、當、傷、我、身、而、仰、待、之、雖、十、餘、霹

靂、不、得、犯、河、邊、臣、即、化、小、魚、以、挾

樹、枝、即、取、魚、焚、之、遂、脩、理、其、船、

數、多、見、在、丸、  
是、ら、の、中、

○日本紀標注卷之十八

○三十六

○日本紀標注卷之十八

○三十六

○日本紀標注卷之十八

○三十六

○日本紀標注卷之十八

○三十六

るべし ○船材、神功紀に注せり ○霹靂、神功紀に注せて、初霹靂木とて、元よ  
あるとのみならず、土人の附托あり、然し奇事ありと、今世ふも去りて ○化小  
魚も奇事あり、唐書五行志に、光啓二年揚州雨魚、同書李雄記に、  
天雨大魚、於宮中、其色黄ふど相類、たゞ、原本小を少み作とり

壬寅四月 ○蒲生、近江国郡名、  
名ふて、和名抄不加萬、不と注せり ○掘江、大坂高津の東

に在りて、仁徳紀に注せるが如し ○其形如人、淮南子地形訓

に、后稷壠、在建木、西、其人死復蘇、其半魚、扶桑略記の此件に、蒲生河、有人魚、是福

瑞物也と記せり ○形如兒、和名抄に、人魚一名鯪魚、魚身人面者也、古今著聞集

に、甘子、伊勢国別保と云、所へ、前刑部少輔忠盛朝臣、下りたるに、浦人日毎、網を

引りたるに、或日大なる魚の、かしらと人のやうにて、有るがら齒もあまらふて、

魚ふたがも、口さし出て、様不似たり、身も世の常の魚ふて有るを、三隻引出したり云々、人魚といふふれ、此跡のたのまありや云々、猶人魚の

も、本草綱目、鯪魚の集解に説りて、大和本草にも、此魚本邦に処々稀有之、亦人魚ノ類ナルベシと云、

砂礫、和名抄に、細石、和名佐佐禮以之、新撰字鏡に、硝、佐々良石と注せり、佐々

々も細小の自みて、礼も良も助辞 ○檜隈、陵、天皇の御母の葬地あると

と上、注せり ○毎氏、上代も由り、家も、姓を賜ひしゆ、其氏々科とあり ○建大柱も、へり、ある由

て、建し、みり、詳あり、ず ○倭漢坂上直、姓氏録に、坂上、大宿禰、後漢靈帝、男、延王之

○日本紀標注卷之十八 ○三十七

魚オホセテ、カ、タテ、ハシラ、スグレテ、ハナハダ、ナツケテ  
科之、建大柱於土山上、時倭漢坂上直、樹柱勝之大高、故時人號之、曰大柱直也

後也三代實錄六不坂上伊美吉斯文等九人賜姓坂上宿祿後漢孝靈帝四代孫阿智使主之裔

雞尾の雞を原本碓不作より十二月庚寅朔天有赤氣長一丈ウエ

今平氏太子傳今平氏太子傳餘形似雞尾是歲皇太子嶋大臣シムシ

同書百濟法同書百濟法共議之錄シムス天皇記スメラミコトノフミ及國記クニツフミ臣連オミムラシ伴トモ

尤旗云々尤旗云々鳴ウ造國造ミヤツコ百八十部モヤツ并公民等本記トモオホミタカラドモノモトツフミヲ

大臣也蘇我馬大臣也蘇我馬子云其由三十四年紀子云其由三十四年紀見見延延なりなり○天皇記○天皇記國記國記も字の如も字の如去書去書ありありむむ皇

極四年紀極四年紀小蝦夷等臨誅小蝦夷等臨誅悉燒悉燒天皇記天皇記國記國記珍寶珍寶船船史惠尺史惠尺即疾取即疾取所燒所燒國記國記而奉而奉

中中大兄大兄ととつつゆゆどど然然書世書世不遺不遺とと休休を聞を聞くくげげ○臣連○臣連もも歷朝歷朝不仕不仕しし大臣大連の大臣大連の

おとを記おとを記えしえしみやみや○伴造○伴造國造國造もも雄略紀雄略紀ふ注ふ注ししつつ○百八十部○百八十部もも其部其部の多の多きをきを云云○公民○公民もも孝子孝子順孫順孫義夫義夫節婦節婦をもをもしめしめ廣く廣く士民士民の上の上を記を記えしえしみやみや

二十九年春二月己丑朔癸巳半二十九年春二月己丑朔癸巳半

はじめ何くれはじめ何くれふふ廿二日廿二日と記と記セセゆゆととへへりり○耕夫○耕夫止止耜耜春春

女不杵女不杵戰國策戰國策五殺五殺大夫死大夫死童子不歌童子不歌諺諺春春者不相杵者不相杵云々云々

抑太子抑太子も逆賊も逆賊馬子馬子を助を助けけ畏畏も君も君を弑を弑しし忠忠良良を殺を殺ししとと記記

日月日月真真不不失失輝輝天地天地も崩も崩たりたりとせむとせむ天地天地日月日月も逆も逆を愛を愛ししけけひひししみやみや撰者撰者の佛の佛碑碑おおしてして知知るるべべしし原本原本耜耜

を耕を耕不不誤誤見見りり今今一本一本不不扱扱るる因因云云法王法王帝帝説説ふふ上上官官薨薨時時巨勢巨勢三三杖杖大夫大夫歌歌伊加伊加

留我留我乃乃止止美美能能乎乎何何波波乃乃多多敷敷波波許許曾曾和和何何於於保保支支美美乃乃弥弥奈奈和和須須良良敷敷米米政政事事要要

略六十一略六十一不不此此歌歌をを飢飢人人の答の答哥哥とと傳傳へへ拾遺集拾遺集今昔物語等今昔物語等不不首首尾尾を聊を聊換換てて共共

以後以後誰誰恃恃哉哉宮宮是是時時諸王諸王諸臣諸臣及及天下天下百姓百姓悉悉

長老長老如如失失愛愛兒兒而而塩塩酢酢之之味味在在口口不不嘗嘗少少幼幼者者如如亡亡慈慈父父母母以以哭哭泣泣

之聲之聲滿滿於於行路行路乃乃耕夫耕夫止止耜耜春女春女不不杵杵皆皆日月日月失失輝輝天地天地既既崩崩自自今今

○日本紀標注卷之十八  
○三十八



小飢人の答歌と記せ、偽るを傳、なるもいとく、久し、又曰美加弥半須、多婆  
佐美夜麻乃、阿迦氣尔、比止乃麻乎之志、和何於保支美波母、又伊加留我乃、已  
能加支夜麻乃、佐可留木乃、蘇良奈留許等乎、支美尔麻乎佐奈、按以上三首の  
中、ふもじめあはれ、諸書不傳、て人も知るは、次の二首と、帝説をおきて、書  
ふは、とらむ、誤  
字も、つらむ、あり

磯長陵も、河内  
国石川郡太子  
村、みり、志、小  
畝福寺山、號、科  
長、又呼御暮山、  
○玄聖、文選、遊  
天台山賦、小、玄  
聖之所遊、化、云  
々、呂向、玄、遠  
也、言、此山皆遠  
聖神仙之所遊  
居變化也、と注

せ、て、○三統も、  
天統地統人統  
を云、と、白虎通  
不見、なり、○  
斷金後漢書王  
常傳、小、頼、靈、武、  
成、斷、金、注、小、易、  
繫辭を引、て、二  
人同心其利斷  
金、と記せ、○  
浄土、法華授記  
品、小、功德、悉、成  
滿、當、得、斯、浄、土  
○時、人、下、之、  
字、通、證、小、行  
と云、と、姑、舊  
小、隨、ふ

貫三統、纂先聖之宏猷、恭敬三寶、  
救黎元之厄、是實太聖也、今太子  
既薨之、我雖異國、心在斷金、某獨  
生之、有何益矣、我以來年、二月、五  
日、必死、因以遇上宮太子於浄土、  
以共化衆生、於是惠慈、當于期日、  
而死之、是以時、人之彼此、共言、其  
獨非上宮太子之聖、惠慈亦聖也、  
是歲新羅遣奈末伊彌買朝貢、仍

智洗爾を下  
智洗遲子作と  
○奈未智と  
名あり下み奈  
未遲子作と  
○灌頂幡と持  
統三年紀又續  
紀九不見と  
？猶大安寺及  
法隆寺資財帳  
み見とたり  
秦寺資財帳と  
灌頂墨流二流、有自所有細字一一流中破、一流大破不用一流、新造と  
り、原本灌を觀み誤とり○葛野秦寺と上み見とる蜂岡寺と

以<sub>テ</sub>表<sub>フ</sub>書<sub>ヲ</sub>奏<sub>シ</sub>使<sub>ハ</sub>旨<sub>ヲ</sub>凡<sub>テ</sub>新羅<sub>ニ</sub>上<sub>ニ</sub>表<sub>ス</sub>蓋始  
起<sub>リ</sub>于<sub>レ</sub>此<sub>ノ</sub>時<sub>ニ</sub>歟

三十一年秋七月、新羅遣<sub>シ</sub>大使奈  
末智洗爾<sub>ヲ</sub>任<sub>シ</sub>那遣<sub>シ</sub>達率奈未智<sub>ヲ</sub>並  
來<sub>リ</sub>朝<sub>ス</sub>仍貢<sub>シ</sub>佛像一具及金塔并<sub>テ</sub>舍  
利且大灌頂幡一具小幡十二條  
即佛像<sub>ヲ</sub>居<sub>セ</sub>於<sub>レ</sub>葛野秦寺<sub>ニ</sub>以<sub>テ</sub>餘舍利  
金塔灌頂幡等<sub>ヲ</sub>皆納<sub>ス</sub>于<sub>レ</sub>四天王寺

醫惠日、續紀二  
十、藥司正六  
位上、難波藥師  
奈良等十一人  
言、遠祖德來、本  
高麗人歸百濟  
國、昔泊瀬朝倉  
朝廷詔百濟國  
訪求才人、爰以  
德來貢進聖朝  
德來五世孫惠  
日、小治田朝廷  
御世、被遣唐學  
得醫術、因號藥  
師、遂以為姓、今  
愚聞子孫不論  
男女、共蒙藥師  
之姓、竊恐名實

是時唐國學問者、僧惠齊、惠光、及  
醫惠日、福因等、並從<sub>テ</sub>智洗爾等<sub>ニ</sub>來  
之、於是惠日等、共奏聞曰、留<sub>シ</sub>于<sub>レ</sub>唐  
國學者、皆學<sub>テ</sub>以<sub>テ</sub>成<sub>シ</sub>業<sub>ヲ</sub>應<sub>シ</sub>喚<sub>ス</sub>、且其唐  
國者、法式脩定珍國也、常須<sub>シ</sub>達<sub>シ</sub>、是  
歲新羅伐<sub>シ</sub>任那<sub>ヲ</sub>、任那附<sub>シ</sub>新羅<sub>ニ</sub>、於是  
天皇將<sub>テ</sub>討<sub>シ</sub>新羅<sub>ヲ</sub>、謀<sub>シ</sub>及<sub>シ</sub>大臣<sub>ニ</sub>、詢<sub>フ</sub>于<sub>レ</sub>群  
卿、田中臣對曰、不可<sub>シ</sub>急<sub>ニ</sub>討<sub>ス</sub>、先察<sub>シ</sub>狀<sub>ヲ</sub>  
以<sub>テ</sub>知<sub>シ</sub>逆<sub>ト</sub>、後擊<sub>ス</sub>之<sub>ヲ</sub>不<sub>レ</sub>晚<sub>カ</sub>也、謂<sub>フ</sub>試<sub>シ</sub>遣<sub>シ</sub>使<sub>ヲ</sub>

錯辭、伏願、改藥  
師、字、蒙、難、波、連

觀其消息アルカタチヲ

許之○唐国上、原本大字、漢倭人の所為、  
あれを刪る○田中臣、姓氏録子、  
田中朝臣、  
武内宿祢五世孫、  
稻目宿祢之後也と云、  
天武十三年、紀、  
田中臣、  
賜姓  
曰朝臣○中臣  
連國、續紀三十  
九、大、中、臣、朝  
臣、清、麻、呂、曾、祖  
國子と云、  
此人、ウ○戎、旅  
も、軍、士、を、云、

中臣連國曰、任那、是元我内官家、  
今新羅人伐而有之、請戒我旅征  
伐新羅、以取任那、附百濟、寧非益  
有于新羅乎、田中臣曰、不然、百濟  
是多反覆之國、道路之間、尚詐之、  
允彼所請、皆非之、故不可附百濟、  
則不果征焉、爰遣吉士磐金於新

倉下也、クラジ  
とよむべし、神  
武紀、不例、ウ

附庸、晋書地理  
志、伯、  
七、  
十、  
里、  
子、  
男、  
五、  
十、  
里、  
不、  
能、  
五、  
十、  
里、  
者、  
不、  
達、  
於、  
天、  
子、  
附、  
於、  
諸、  
侯、  
曰、  
附、  
庸、

羅遣吉士倉下於任那、令問任那  
之事、時新羅國主遣八大夫、啓新  
羅國事於磐金、且啓任那國事於  
倉下、因約曰、任那小國、スコシキクニナレ天皇附庸、ホトスカノクニナリ  
何新羅輒有之、隨常定内官家願、  
無煩矣、則奈末智洗遲、副於吉士  
磐金、復以任那人達率奈未遲、副  
於吉士倉下、仍貢兩國之調、然磐  
金等未及于還、即年以大德境部

波多臣、姓氏錄  
み、八多朝臣、武  
内宿祢命之後  
也、天武十三年、  
紀、波多臣賜  
姓曰朝臣、○近  
江脚身臣の脚  
身、同国の地  
名ありべし、○  
大伴連、上、み  
見、延、たる、大伴  
昨、連、み、や、○大  
倉、名、あり、是  
を、大、倉、の、誤、と

臣雄摩侶、小德中臣、連國、爲大將  
軍、以小德河邊、臣祢受、小德物部、  
依網、連乙等、小德波多、臣廣庭、小  
德近江、脚身、臣飯蓋、小德平群、臣  
宇志、小德大伴、連、名、關小德大宅、臣  
軍、爲副將軍、率數萬衆、以征討新  
羅、時磐金等共會於津、將發船、以  
候風波、於是船師滿海、多至兩國、  
使人望瞻之、愕然乃還留焉、夏代

云、る、説、を、非、ふ  
ア

堪遲大倉、爲任那、調使、而貢上、於  
是磐金等相謂之曰、是軍起之、既  
違前期、是以任那之事、今亦不成  
矣、則發船而渡之、唯將軍等始到  
任那、而議之、欲襲新羅、於是新羅、  
國王、聞軍多至、而豫懼之、請服時  
將軍等共議、以上表之、天皇聽矣、  
冬十一月、磐金倉下等、至自新羅、  
時大臣問其狀、對曰、新羅奉命、以

新羅幣物也、八年紀不見也

驚懼之、則並差專使、因以貢兩國之調、然見船師至、而朝貢使人更還耳、但調猶貢上、爰大臣曰、悔乎早遣師矣、時人曰、是軍事者、境部臣阿曇連、先多得新羅幣物之故、又勸大臣、是以未待使旨、而早征伐耳、初磐金等渡新羅之日、比及津莊、船一艘迎於海浦、磐金問之曰、是船者何國、迎船對曰、新羅船

三十二年也、長曆不與也、三十一、年あり、○戊申三日、○有一僧云々、平氏太子傳ふ、以答殺祖父と、  
も、事實を傳た  
る、按ふ僧の逆  
を犯せば、是を

也、磐金亦曰、曷無任那之迎船、即時更爲任那、加一船、其新羅以迎船二艘、始于是時、歟、自春至秋、霖雨大水、五穀不登焉、  
三十二年夏四月、丙午朔、戊申、有一僧執斧、毆祖父、時天皇聞之、召大臣、詔之曰、夫出家者、賴歸三寶、具懷戒法、何無懺忌、輒犯惡逆、今朕聞、有僧以毆祖父、故悉聚諸寺、

始として、往々見たとす。僧尼令小凡僧尼殺人奸盜及詐稱得聖道並依法律付官司科罪凡僧尼非在寺院別立道場聚衆教化并妄說罪福及毆擊長宿者皆還俗因郡官司知而不禁止者依律科罪云々類聚三代格弘仁三年七月十日官符云殺人奸盜此是不輕隨犯還俗一如外法同延曆四年五月廿五日官符云今見衆僧多乖法貴或私定擅越出入閭巷或誣稱佛驗誑誤愚民非唯比丘之不慎教律抑是所司之不勤捉搦也云々猶か、はる引ふ堪ず、北史武帝紀云諸州坑沙門毀諸佛像云々僧尼の惡行を惡てふ○惡逆僧及諸下小僧字を脱し又落字を○將罪按み逆を犯しと云と僧ありと云とも惚て衆僧尼の不正小誇もれしゆゑ此詔

僧尼以推問之、若事實者重罪之

於是集諸僧尼而推之、則惡逆僧及諸尼並將罪、於是百濟觀勒僧表上以言、夫佛法自西國至于漢經三百歲、乃傳之、至於百濟國而僅一百年矣、然我王聞日本天皇

○觀勒上小見とたり○三百歲後漢書西域傳天竺國條小世傳明帝夢見金人長大頂有光明以問群臣或曰西方有神名曰佛其形長丈六尺而黃金色帝於是遣使天竺問佛道法遂於中國圖畫形像焉楚王英始信其術北史韓賢傳云漢明帝時西域以白馬負佛經送洛因立白馬寺其函傳於此寺事物紀原云漢明帝永平中摩騰竺法蘭以白馬馱經至東都即四十二章經中國之有佛經此蓋其始也鄴城舊事云永平十年經像初來也と云、永平十年を我無仁天皇九十六年不當也、東國通鑑百濟枕流王元年條云九月胡僧摩羅難陀自晉至百濟王迎致宮內禮敬焉百濟佛法始此と云、枕流王の元年を我仁德天皇七十二年不當也、此間佛の支

之賢哲而貢上佛像及內典未滿百歲故當今時以僧尼未習法律輒犯惡逆是以諸僧尼惶懼以不知所如仰願其除惡逆者以外僧悉赦而勿罪是大功德也、天皇乃聽之

○日本紀標注卷之十八 ○四十四

那<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>こと、三百十五年あり○僅一<sub>レ</sub>百年、百濟<sub>レ</sub>流<sub>レ</sub>王<sub>レ</sub>元年より、我<sub>レ</sub>欽<sub>レ</sub>明<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>十三年より、彼<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>し<sub>レ</sub>位と、百六十八年を經<sub>レ</sub>しを、一<sub>レ</sub>百年と<sub>レ</sub>大<sub>レ</sub>虛<sub>レ</sub>縮<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>○未<sub>レ</sub>滿百<sub>レ</sub>歲、按<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>欽<sub>レ</sub>明<sub>レ</sub>天<sub>レ</sub>皇<sub>レ</sub>十三年より、今年<sub>レ</sub>至<sub>レ</sub>り七<sub>レ</sub>十三<sub>レ</sub>年を經<sub>レ</sub>たり○未<sub>レ</sub>習<sub>レ</sub>法<sub>レ</sub>律<sub>レ</sub>、か<sub>レ</sub>る<sub>レ</sub>年<sub>レ</sub>數<sub>レ</sub>を經<sub>レ</sub>ても習<sub>レ</sub>熟<sub>レ</sub>せ<sub>レ</sub>ざ<sub>レ</sub>と云<sub>レ</sub>む、幾<sub>レ</sub>千<sub>レ</sub>年を經<sub>レ</sub>む<sub>レ</sub>熟<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>む○惡<sub>レ</sub>逆<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>律<sub>レ</sub>の八<sub>レ</sub>逆<sub>レ</sub>、四<sub>レ</sub>曰<sub>レ</sub>惡<sub>レ</sub>逆<sub>レ</sub>、注<sub>レ</sub>小<sub>レ</sub>謂<sub>レ</sub>毆<sub>レ</sub>及<sub>レ</sub>謀<sub>レ</sub>殺<sub>レ</sub>祖<sub>レ</sub>父<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>父<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>殺<sub>レ</sub>伯<sub>レ</sub>叔<sub>レ</sub>父<sub>レ</sub>姑<sub>レ</sub>、兄<sub>レ</sub>姊<sub>レ</sub>外<sub>レ</sub>祖<sub>レ</sub>父<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>、夫<sub>レ</sub>婦<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>父<sub>レ</sub>母<sub>レ</sub>と<sub>レ</sub>云<sub>レ</sub>む

戊午<sub>三</sub>十<sub>三</sub>日○  
僧<sub>正</sub>僧<sub>都</sub>類<sub>聚</sub>  
俗<sub>人</sub>故<sub>自</sub>今<sub>已</sub>後<sub>任</sub>僧<sub>正</sub>僧<sub>都</sub>仍

應<sub>檢</sub>按<sub>僧</sub>尼<sub>壬</sub>戌<sub>以</sub>觀<sub>勒</sub>僧<sub>爲</sub>僧

正<sub>以</sub>鞞<sub>部</sub>德<sub>積</sub>爲<sub>僧</sub>都<sub>即</sub>日<sub>以</sub>阿

曇<sub>連</sub>爲<sub>法</sub>頭

云々、拾<sub>芥</sub>抄<sub>小</sub>、僧<sub>正</sub>二<sub>人</sub>權<sub>僧</sub>都<sub>大</sub>一<sub>人</sub>少<sub>二</sub>人<sub>權</sub>律<sub>師</sub>四<sub>人</sub>云々、續<sub>紀</sub>三<sub>十</sub>二<sub>小</sub>、詔<sub>僧</sub>正<sub>賻</sub>物<sub>准</sub>從<sub>四</sub>位<sub>大</sub>少<sub>僧</sub>都<sub>准</sub>正<sub>五</sub>位<sub>續</sub>後<sub>紀</sub>五<sub>小</sub>、大<sub>安</sub>寺<sub>僧</sub>傳<sub>灯</sub>大<sub>法</sub>師<sub>位</sub>

惠<sub>靈</sub>、俗<sub>姓</sub>名<sub>紀</sub>、朝<sub>臣</sub>春<sub>主</sub>、叙<sub>從</sub>六<sub>位</sub>上<sub>爲</sub>唐<sub>譯</sub>語<sub>兼</sub>但<sub>馬</sub>權<sub>掾</sub>、按<sub>僧</sub>正<sub>以</sub>下<sub>之</sub>物<sub>故</sub>稱<sub>之</sub>卒<sub>是</sub>則<sub>四</sub>位<sub>以</sub>下<sub>之</sub>通<sub>稱</sub>也<sub>云</sub>々○壬<sub>戌</sub>十<sub>七</sub>日○阿<sub>曇</sub>連<sub>と</sub>皇<sub>極</sub>紀<sub>小</sub>阿<sub>曇</sub>連<sub>比</sub>羅<sub>夫</sub>と<sub>云</sub>、入<sub>見</sub>ゆ<sub>是</sub>り、關<sub>名</sub>集<sub>解</sub>後<sub>人</sub>所<sub>加</sub>として<sub>刪</sub>られ<sub>ど</sub>、去<sub>ら</sub>る<sub>く</sub>原本<sub>小</sub>從<sub>ふ</sub>○法<sub>頭</sub>孝<sub>德</sub>紀<sub>小</sub>、以<sub>來</sub>目<sub>臣</sub>三<sub>輪</sub>、色<sub>夫</sub>君<sub>額</sub>田<sub>部</sub>甥<sub>爲</sub>法<sub>頭</sub>と<sub>云</sub>、是<sub>を</sub>後<sub>小</sub>云<sub>、</sub>女<sub>蕃</sub>察<sub>の</sub>官<sub>吏</sub>也<sub>、元</sub>亨

叙<sub>書</sub>資<sub>治</sub>表<sub>小</sub>、置<sub>寺</sub>司<sub>曰</sub>法<sub>頭</sub>  
丙<sub>子</sub>三<sub>日</sub>○所<sub>造</sub>之<sub>緣</sub>と<sub>緣</sub>起<sub>を</sub>云<sub>、</sub>○入<sub>道</sub>と<sub>佛</sub>僧<sub>と</sub>あり<sub>て</sub>、佛<sub>道</sub>小<sub>入</sub>る<sub>人</sub>を<sub>云</sub>、る<sub>を</sub>後<sub>世</sub>と<sub>此</sub>号<sub>甚</sub>重<sub>して</sub>、凡<sub>人</sub>の上<sub>小</sub>と<sub>稱</sub>さ<sub>る</sub>存<sub>と</sub>、あ<sub>ら</sub>る<sub>を</sub>し<sub>、官</sub>位<sub>訓</sub>小<sub>記</sub>せ<sub>り</sub>、縁<sub>は</sub>度<sub>緣</sub>を<sub>へ</sub>

秋<sub>九</sub>月<sub>甲</sub>戌<sub>朔</sub>丙<sub>子</sub>、按<sub>寺</sub>及<sub>僧</sub>尼<sub>具</sub>錄<sub>其</sub>、寺<sub>所</sub>造<sub>之</sub>緣<sub>亦</sub>僧<sub>尼</sub>入<sub>道</sub>之<sub>緣</sub>及<sub>度</sub>之<sub>年</sub>月<sub>日</sub>也<sub>當</sub>是<sub>時</sub>有<sub>寺</sub>四<sub>十</sub>六<sub>所</sub>、僧<sub>八</sub>百<sub>十</sub>六<sub>人</sub>、尼<sub>五</sub>百<sub>六</sub>十<sub>九</sub>人、并<sub>一</sub>千<sub>三</sub>百<sub>八</sub>十<sub>五</sub>人

度之年と、得度の年月を録を云て、是を度牒と云、猶其、不關るるを委、得  
 度考、不記し置つ。○寺四十六所、佛渡來七十三年の間、造る所を云、扶桑略  
 記持統天皇六年、條、天下諸寺凡五百四十五寺別、施入燈分箱一千束と云、  
 此三十二年より、持統六年まで、纔六十五年にして、四百九十九寺益たり。○一  
 千三百八十五人、是を四十六寺に賦む、一寺に三十人、不剩たり、寺院の廣大を  
 推べし、續紀九神龜元年十月、條、治部省奏言、勘檢京及諸国僧尼名籍、  
 或入道、元由、披陳不明、或名存、細帳、還落官籍、或形、自誌、壓既不相當、惣一千一百  
 二十二人、准量格式、合給公驗、不知處分、伏聽天裁、詔報曰、白鳳以來、朱雀以前年  
 代玄遠、尋問難明、亦所司、記注多有粗略、一定見名、仍給公驗、と云、公驗を度牒  
 不て、是、不洩たる僧數を記せ、同十二年、天平九年九月、條、施兩京四畿二監僧  
 正以下、沙弥以上、惣二千三百七十六人、綿并鹽各有差と見ゆ、此數を以て量ら  
 る、天下の僧侶、凡三万人、不餘るべし、賊民の世、不蕃殖せし、實、不慨歎すべき  
 ○大臣を馬子  
 あり。○本居を  
 産土、不て其こ  
 と魂の、ゆくへ  
 と云、書、不委く  
 記し、おきつ。○

冬十月癸卯朔、大臣遣阿曇連  
 阿倍臣摩侶二臣、令奏于天皇曰、  
 葛城縣者、元臣之本居也、故因其

葛城縣も、恐、  
 高市の誤、不  
 あらじ、蘇我  
 高市郡の地  
 名、不て、志、不  
 郡曾我村、  
 ○自蘇我出之  
 按、不天皇の御  
 母、堅鹽媛、蘇  
 我、稻目の女、  
 不、馬子も、稻目  
 の子、不、  
 舅と、詔、  
 抄、不、母之、昆弟  
 為、舅、母、方、乃、乎  
 知、不、  
 父、不、  
 馬子、不、  
 ○日本紀標注卷之十八  
 ○四十六

縣爲姓名、是以冀之常、得其縣、以  
 欲爲臣之封縣、於是天皇詔曰、今  
 朕則自蘇我出之、大臣亦爲朕舅  
 也、故大臣之言、夜言矣、夜不明、日  
 言矣、則日不晚、何辭不用、然今當  
 朕之世、頓失是縣、後君曰、愚癡婦  
 人、臨天下、以頓亡其縣、豈獨朕不  
 賢耶、大臣亦不忠、是後葉之惡名  
 則不聽



を以てして、いそぎも又賊情をそたられり、  
誰れ惡まざらむ、此詔をいとむたふとし

戊寅七日○惠  
灌、此僧の傳、元  
亨、秋書、子見を  
たり○丁未、六  
日○大臣薨、按  
み此賊、天然を  
以て終、たると、  
何の天幸○桃  
原も、雄略紀、み  
上、桃原下、桃原  
真神原とあり、  
即大和国高市  
郡の地名○嶋  
大臣、按み万葉  
小嶋、宮、島之、榛  
原ふと見よた

三十三年春正月、壬申朔、戊寅、高  
麗王、貢僧惠灌、仍任僧正、  
三十四年春正月、桃李華之、三月  
寒、以霜降、夏五月、戊子朔、丁未、大  
臣薨、仍葬于桃原墓、大臣則稻目  
宿禰之子也、性有武略、亦有辨才、  
以恭敬三寶、家於飛鳥河之傍、乃  
庭中開小池、仍興小嶋於池中、故

るも、惣て此嶋  
より出たり○

強盜竊盜、按み  
賊盜律、凡強  
盜不得財、徒二  
年、一尺、徒三年、  
二端、加一等、十  
五端、及傷人者  
絞、殺人者、斬、其  
持仗者、雖不得  
財、遠流、十端、絞、傷人者、斬、凡竊盜、不得財、笞五十、一尺、杖六十、一端、加一等、五端、徒  
一年、五端、加一等、五十端、加役流、一尺、杖六十、一端、加一等、五端、徒  
准罪の輕重を  
量る○格和名  
抄、格、似狐而  
善睡者也、無之  
奈と注せ、是  
を理、種、小

時、人曰嶋、大臣、六月、雪也、是歲自  
三月、至七月、霖雨、天下大飢、之老  
者、噉草根、而死于道、垂幼者、含乳、  
以母子共死、又強盜竊盜、并大起  
之、不可止  
三十五年春二月、陸奥國有格化  
久、以歌之、夏五月、有蠅、聚集其凝  
累十丈之、浮虛、以越信濃、坂嶋音

て頭天鼻出、如雷則東至上野國而自散

目青色、身を黄、黒褐色と、本草啓蒙に記せり。○化人、原本化を比し作

甲辰廿七日○  
三十六年春二月、戊寅朔甲辰、天

皇卧病、三月丁未朔戊申、日有蝕

盡之、日蝕爰ふ始見と云ふも、

あつ、つうり、浅、紀小日蝕と訓、

召田村皇子、謂之曰、昇天位而經

綸、鴻基、馭萬機、以亭育黎元、本非

可輒言、恒之所重、故汝慎以察之、不

汝肝稚之、若雖心望、而勿誼言、必

待群言、以宜從、癸丑天皇崩之、年時

七十、即殯於南庭

つ、禁秘御抄に、日月蝕、主上、當日月曜時、御慎殊重、不然、年非輕、天子殊不當其光

雖蝕以前以後、不當其夜光云々○壬子六日○不可諱、史記商君傳に、公叔有病有

如、不可諱、將奈社稷、何と云々、病の治らざるを云、○田村皇子を、敏達天皇の御

孫とて、押坂彦人大兄皇子の御子あり○亭育を、亭毒とて、祖庭宇苑に亭毒謂

天地之氣所以覆載、養育蒼生と云々○山背大兄を、厩戸皇子の御子○癸丑七

日○七十五、紹運録水鏡等、七十三と記し、記に參拾、漆歳と云ふも、疑は七十

三を、倒小誤、た、夏四月、壬午朔辛卯、雹零大如桃

子、壬辰、雹零大如李子、自春至夏、早之、秋九月、乙巳朔戊午、始起天

支符シフ改カ皇ミコ哀禮ミモノトヲ是時群臣各誅シテトマス於殯宮先ニ  
たる不從ふ即シ十四日あり○竹田皇子と天  
皇の御腹ミ生マ坐ママ諸陵式シ不レ  
磯長山田陵推シ古天皇在河内  
国石川郡北城ノ東西二町南北二町陵戸一煙守戸四  
煙志不在南山田村○壬辰十四日

皇哀禮是時群臣各誅於殯宮先  
是天皇遺詔於群臣曰此年五穀  
不登百姓大飢其為朕興陵以勿  
厚葬便宜葬于竹田皇子之陵壬  
辰葬竹田皇子之陵



日本紀標注卷之十八終

八

